

LA STORIA D'AMORE

■ NATA CON TE ~あ
なたと紡ぐ☒恋☒物語
~

璃空埜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

桜の花弁が舞うある日――

私立 弥吾呉学園に、鴻山 龍神（こうやま りようが）は編入する。

新たな学校、新たな出会いまたはかつての友との再会していく中で彼は同じクラスの狐の女子生徒、白上フブキと出会う。

そして、紆余曲折を得た後、彼女は彼をこう誘うのだった。

「あなたもゲームマーズの一員になりませんか？」

それは始まりの言葉

この言葉を皮切りに運命の歯車は大きく動き始める

そう、これは————とある理由で編入してきた少年とある少女達が紡ぐ……

————絆の物語————

目次

START OF YOUR STORY	1
Y, S a c t 1	—
START OF YOUR STORY	40
Y, S a c t 2	—
START OF YOUR STORY	79
Y, S a c t 3	—
高等部生徒会とファンタジークラブとか つての相棒 a t 4 / 1 6 (木) a c t	112
1	—

START OF YOUR STORY, S act

— 1

「あなたもゲームマーズの一員になりませんか？」

まだ桜が舞う屋上で、俺を呼び出した彼女は日の光に照らされ宝石のように輝く白い髪をなびかせつつ日溜まりの中でも色褪せないまぶしい笑顔と共にこちらへと手を差し伸べてくる。

—————まずはなぜ『ゲームマーズ』に誘われたのか。

—————それを話すには一週間前……

—————俺がこの学園に編入した日まで遡る……



桜の花びらが風によつて空高く舞い上がつていく様を何となしに見送りつつ、これから通うことになる『私立 弥吾呉学園』の校門に寄りかかり待ち人を待ち続ける。

……なうんて、別に彼氏彼女の会瀬ではなく今日からお世話になるクラスの担任を待つているだけなんだが。

「にしたつて、遅いだろ……………」

かれこれ既にここに来てから一時間。昨日連絡した時に提示された待ち合わせの時間はとうの昔に過ぎ去り、辺りには俺と同じデザインの制服に身を包んだ生徒達が俺のことを遠巻きに不思議そうな、または、珍しそうな視線を向けながら通り過ぎていく。

「……………はあ……………。身分証は貰つてるし入つてもいいだろうがこの学園の広さからして迷子は確実、最悪初日から遅刻か？」

電話口じゃ結構しつかりしてそうだったつうのに……………先行き不安だぞ……………？

「……………あのう……………」

「？」

軽く頭を抱え込み、溜め息をついていると不思議な形の髪飾りと背中から生えている

白い翼が特徴的な、左腕に「生徒会」とかかれた腕章をつけた白銀に少し青色の混ざった髪の少女から声をかけられる。

「……学園になにかご用ですか………?」

「え……つと、一応今日から登校予定の編入生で、先生待ちなんです………」

「………転校生………?ちよつと待つててください………」

生徒会所属なら話してもいいかと判断し、転校生であることを明かすと少女はスカートのポケットからスマホを取り出してどこかに連絡し始める。そして、二言、三言会話した後にスマホを同じ場所にしまいこちらへ向き直ると、

「今確認をとりました。担当の先生が立て込んでいるため私のご案内します」

「わかりました」

話してみるもんだな、これでチラチラとこちらを見る視線達から解放される………。

そうして、俺は足元の荷物を手に取ってから、先に歩き始めた少女の隣に並ぶ。

「いやはや………助かりました。ありがとうございます」

「………いえ、生徒会として当たり前のことをしたまです。それと貴方の方が先輩なので敬語はよしてください」

「あ………そう言うことならそうさせてもらおう。えつと………」

「…………私は天音あまねかなた。ここの中等部の生徒会書記を務めています」

「天音…………ね、俺は今日からここの高等部二年、鴻山こうやま 龍神りょうが。こうなったのも何かの縁だ、よろしく頼むぜ」

「…………よろしく……………です」

……………会話の間も一切こつちを見ないな。話し方からしてクールな子なんだろうが……………初手から嫌われたか?……………流石にそんなことは……………

「後……………あまり話しかけないでいただけるとありがたいです」

……………ねえよな?」

そこから特に会話らしい会話もなく、静かに、しずか……………に広い学園内を天音と並んで歩く。

……………初日からこれはキツいつてえの……………

「……………つたく、どうしたもんかね……………」

そうして俺が先とは別の意味で頭を抱えていると、かなり広いグラウンドに差し掛かったところで初めて天音がこちらを振り返り、

「……………あそこが高等部校舎となります」

「あ、ああ。ありが……………」

グラウンドの先にある建物を指差し、俺がお礼を話そうとしたと……その時。カキ
ンッ！という綺麗な音がしたかと思うと……

「おーら……あつ!!あぶねえつ!!」

「……………硬球が一直線にこちらへと向かってきていた!!」

「……………そして、天音はそれに気づいていない!!」

「天音っ!」

「へ? わきや!?!」

咄嗟に左手で目の前の華奢なその肩を掴んでこちらへと引き寄せるのと同時に硬球の落下コースを予測して右手をかざす。すると、バチン!!という豪快な音と共にかざした右手にもものすごい衝撃が……………

「……………つ!!!」

ああああああああああ……………これはヤバいいいいいい……………!!
思わず天音の肩においていた手を離して踞る……………!!。

「あつあああああああ……」

「だ、大丈夫か?」

「~~~~~だつ、大丈夫……!!だからんしゅ~~~~つに!戻ってくれ……!」

「そ、そうか……」

心配そうにこちらへ来てくれた野球部とおぼしき生徒にボールを投げ返してから、あの程度痛みが引いた右手を庇いつつ身を起こし天音の方へ向くと……

「……………天音?」

「へへへへへい!!!」

へい!つて女の子が使うような言葉使いじゃねえぞ……?まあそれよりも……

「顔が真っ赤だが……大丈夫「だあああああああああつ!!!」つて今度は何事だよつ!」

トントン拍子になにか起こりすぎだろ!?

俺が天音に声を掛けようとした瞬間に俺達が歩いて通ってきた曲がり角からママチャリでサイクリングレースレベルのドリフトをしつつ、長い髪を振り乱し、スーツを乱雑に纏った女性が姿を現した。

「!!発見!!」



「はあ~~~~間合つてよかつたよ」

「間に合つてよかつたよ~~~~間合つてよかつたよ~~~~」

しこたま打ち付けた頬を擦りつつ、先程の爆走ママチャリライダー~~~~もとい、今日から俺の担任になるといふ郡道美玲さん~~~~昨日電話口で話した人の少し後ろについて教室を目指す。

~~~~しつかりしてそんな先生像はすでに儂く夢と化して散つた~~~~否、そんな人なんてそもそもいなかったんだ、そう思うとする。

「でも、ホントにごめんなさい。途中で編入してくる子なんて始めてで張り切つて飲んでたら飲みすぎてしまったみたい」

「~~~~」

~~~~。

「さ、さあ！ついたわよ」

ごまかしたな、この人。

「さて~~~~それじゃ、私が入つて少ししたら呼ぶからそうしたら入つてきてちょうだい」
「~~~~~~~~はあい」

俺の返事にムスツとした郡道先生だったが、流石に今までのおこないからしてそんな

るのも必然と感じたのか少し肩を落として、教室へと入ろうとするのを見……

「……………せめて」

「……………」

「あなたは綺麗な人なんだから笑って入ってくれないと……俺をの立つ瀬がないつすよ」

「!?せ、先生をからかうなあ!!」

「ははっ! そうそうそんな感じに元気にいかないよ」

「~~~~っ! 先生をからかう人なんて知らない!!」

「あ、それともう一つ」

「何!!」

「俺の登場するまでにどのくらいかかりますか?」

「少し長い話があるから15分後くらいっ!!」

俺の言葉に一瞬で顔を真っ赤にした郡道先生がそのまま今度こそ教室へと入って行く。

『はい! 皆さつさと席につく!!』

『あれ? 先生、なんで朝から顔、真っ赤っ赤何ですか?』

『……………昨日、酒でも飲みすぎたんですか?』

『うるさい!!』

『先生え!! 今日来るとか言う転入生ってもう来てるのか?』

『紹介の前に色々話さなきゃいけないの!! だから早く席につく!!』

すると、直ぐ様賑やかな声達が教室から聞こえてきた。

そりやそうだ、ああいう面白い先生つてのは生徒から人気があるような先生だからな。そんな先生が暗い顔してたらいけないつての。……………さて。

「大体15分後……………周るか」

俺は鞆の中から最新型小型ゲーム機《ホイッチ》を取り出してその一番手前にあるレトロSDガンダムゲームを起動させて、昨日進めたところの続きからやり始める。

このゲームこちらの操作バランス性が悪い上にマップではありきたりなレベルのCPUだが、戦闘フェイズとなればさながらアムロやシャアのような最強格ニュータイプのようにこちらの攻撃を躲し、的確にこちらへと攻撃を当ててくるから油断ならない。しかもその一撃がこちらのHPをぐっそり持つてくもんだから嫌になる。

「……………ま、当たるだけましか」

そうぼやきつつ敵の一小隊をギリギリで撃滅する。

いや……………あのゲームは本当にきつかった……………まさか、一面攻略するのに丸々3日費やすとは思わなかった。

「あ、やべ」

そう思い直していた直後、うっかりターン進行してしまい敵要塞から出撃してきた砲台に接続した敵小隊の掃射で不運にも派遣していたこちらの6小隊と戦艦2隻が溶ける……………おかしいなあ、ちらつと見えた当たる確率50%ぐらいだったのに何で皆当たるのさ。

「……………ん〜」

そうすつと……………どうすつかね。さっきの方に送っていたのが最安量産機、最安戦艦とはいえ合計36機と2隻分の資金を投入するのは避けたい。かといって別面の方から回す艦隊の余裕はナツシングで……………あ、いや確かあの砲台の攻撃に対して耐性のある大型モビルスーツがあつたはず。資金的には少し痛手だが、また36機作るよかはましか……………。

▽▽▽▽▽▽▽3分経過▽▽▽▽▽▽▽

おおつとお……………?ここでサイコミユ兵器持ち持ってくるか。仕方ないがそうならこつちもエース部隊をぶつけないとキツいな。つてまてまて、別面でも巨大モビルアーマー乱立?ふざけんなって言いてえわ……………そつちは壁小隊向かわせて粘ってもらうか。

▽▽▽▽▽▽6分経過▽▽▽▽▽▽

……よしよし、さっきの大盤振る舞いで相手の資金は雀の涙程度。ここで一気に切り込みを入れていきたいが……そう上手くはいかないか。壁を作られたらそう簡単に崩せれないや……つて！あつあつ、本拠地に隠密部隊が！しかもあまりいいモビルスーツ配置してないし!!くつそ、とにかく今は粘るのが先決か……」

▽▽▽▽▽▽9分経過▽▽▽▽▽▽

「つしーこれである程度の期間は攻めてこねえだろ。……だがこつちも大方のモビルスーツの修復にちよい時間をくつちまうから……こりやふり出しにもどつちまったか?いや、こつちも何ターンか準備に回すか……。さっきの劇戦中に別動隊動かし、補給ポイントを占拠しておいたから資金に余裕も……。おお!?コイツら作れるようになってる!!よつしや勝つたかってコイツ、資金どんだけ食うんだよ!?そりや性能やからからすりや高くはなるだろうが、それでも生産100万、改造50万、補給修理25万はおかしいだろ!?!くつそ……これじゃ作つたとしてもすぐに投入つてわけにはいかねえな……。ただ、なるべく2、3機は作りてえとこだが……」

「え?この機体、生産しないの?」

「生産したとしても維持するのにかなり負担がかかるし現状の資金のプラマイじゃよくて10ターンちょいは保つだろうがそれまでに相手を崩せる保証がない。とすればまずは相手の出方を伺いつつとこころだ」

「なるほどなるほど。それじゃこの子を盾として運用するのは？」

「それもいいかも知れねえがまだ早い」

「どうして？」

「コイツの真価を發揮するのはもうちょい先だ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼12分経過▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「わ!!すごい!!相手の機体が溶けた!!」

「な? さっきのお前みたいに装甲値高いし、1フィールド持ちつてことでこいつを盾役だと思いがちな奴は多いけども、こいつの真価はこういう大規模戦闘での圧倒的殲滅力だからな。さあくどんどん溶かせく……………はい終了つと」

「ほあくあれだけあった敵艦隊がもう全滅しちゃった」

「よし、それじゃ後はここの補給ポイントを占拠して防衛組を配置してから撤退だ」

「え? ここで攻めたら勝てるんじゃないの?」

「いや、それは早計だ。さっき自軍本拠地マップ見てたからわかると思うが補給拠点が六つあったろ?」

「あ、それが敵にもあるのか……それじゃさっきのちよつと削られた状態じゃ」

「ああ。このゲームは機体の生産に1ターンは確実に必要となる。だが、補給拠点一つにつき4機、本拠地マップだけでも最高24機、そこに残存兵力と別マップからの増援を加えられたらこつちがじり貧で負けちまうからな。……………ん？」

「うん？」

ここで初めて俺はゲーム画面から顔をあげる。すると、目の前には透き通った白銀の髪を腰までさらりと流し、その髪の間と腰辺りから髪の色と同じケモ耳と尻尾（ただ、尻尾の先は黒くなりな）にやら星の模様が描かれている（を生やした同い年ぐらいの女子生徒がおり、興味津々というのを物語る輝きを放つ瞳をこちらへと向けていた。

「うっお……………！」

「にゃ？？」

「……………猫？」

「狐じやい!!」

「いや、『にゃ』って……………猫やんけ」

「ち〜が〜う〜!!私は!!狐じやい!!」

驚きの余り、目の前の彼女のポツリと溢した言葉に反射的に返しちまったが……………反応的に毎度弄られてるネタみたいだな。ついでに背伸びをしつつ大袈裟に腕を振り

上げて言い返す姿に何か落ち着けた。

「とうか、君……誰？」

「今頃かい。俺の事はすぐにわかるだろうが、お前はここでゆっくりしていいのかわかる？」

「え？」

「俺はここに居る理由があるが……お前は遅刻だろ？」

腕時計を見てみると丁度時間は8時29分を指している。あの特急便の後、郡道先生から受けた説明じゃこの朝のSHRは大体8時15分頃開始……今日は俺の手続きとかがあつたことから2分遅れで始まつたんだが……まあ、どっちにしろこの子は遅刻確定だあな……それに

「……ま、骨は拾つといてやるよ」

「へ「しいくくらあくくかあくくみいくくくく……こやあん……」

おお、狐の鳴き声……か？まあだけどなんだろな、さつきの猫の鳴き声の方がしつくり来てしまう感じがあるや。

「ぐつぐぐぐ郡道先生……おはようございます……」

「おそよう、白上。重役出勤とはいいご身分ね？」

「えつええと……」

白上とやら？ そんな助けを求めるような瞳で見られても俺にはどうしようもねえぞ？
つか、先生？ あんたも人の事あまり言えねえぞ？

「はあ……先生」

「あつ……！」

「こいつの処罰は後で時間があるときにたつぷりこつてりグツグツグツと煮るなりカリツカリツに焼くなりするべきでは？」

「にや……！」

「そうねえ……。流石、いいこと言うじゃない」

……やっぱり猫だな、この子。

俺の言葉に一度は顔を煌めかせた白上とやらだったがすぐさまその顔は絶望に変わり、対照的に郡道先生は満面の笑みと変わる。

「それじゃ、早速お願いするわ。白上も一旦教室に入って……また後でたあ……
~~~~つぷりと、O・H・A・N・A・S・I、しましやうね？」

「……ひゃい……！」

「ま、ドンマイ」

せめてもの慰めでそう声を掛けてがつくりとしたその子が教室へと入るのを見送った後、郡道先生の後に続いて俺も教室内へと足を踏み入れる。

『お……きたきた』

『やった！イケメンきた！』『これで勝つる!!』

『お、デュエット出来たら面白そう♪』

『んっ？アイツ……まさか？』

『どんな人だろう？』

『面白そうな人なら余も嬉しいのだが』

『よお、遅刻狐……いや猫』『くうう……なにも言い返せにやい……』『あはは……』

『へえ……』

『はいはい！一旦静かに静かに!!』

先生が手を叩きガヤガヤしていた教室の生徒達を静まらせる。

『それじゃ、早速編入生君よろしく!』

「つと……」

早速投げられたことにより、教室中の視線が俺に集まり……

—————否応なくあの時を連想してしまう。

「……………」

一度小さく深呼吸をして、直ぐに切り替えまずは背後のホワイトボードにさらさらと俺の名前を綴り、忘れずに括弧がきで読み仮名も降しておく。

「鴻やm「あー……………っ!!!」おうわ、びっくりしたあ」

何だ何だ？やけに元氣よく茶髪を後ろで一つにまとめた少しチャラそうな奴が俺のことを指差しながら叫びやがったんだが……………知り合いにあんな奴いたか？

「どっかで見たと思つたら……………お前シンか!!」

……………ん？シン……………？まさか……………

「……………金剛?」

「そうそう！懐かしいなく久しぶりだなあ〜!!小学校以来だっけ?」

「だなく。ただ一旦静かにしてろ、積もる話もあるがお前以外の人には自己紹介せなならんぞろが」

「つとそうだったそうだった」

昔と同じように照れると左手で頭を搔く癖が変わらない俺の自己紹介計画を初っぱなからぶち壊してくれたこの男子生徒は俺の昔馴染み、おひとり鳳 こんどう金剛。小学生時代じゃ『外の金剛、室内の龍』だとか言う謎のタッグ名をつけられるほどによく一緒に帰るなり遊ぶなりしていた奴だ。因みにこのタッグ名、外の遊びなら金剛に敵うものはなく、中の遊びなら俺、龍神に敵うものがいなかったからつけられたそうなの。



「コホン、うるさい奴が入りましたけども改めて……………今日から皆さんと共にここで過ごすこととなりました、鴻山 龍神です。以後お見知りおきを」

「先に言つとくとコイツ、かなりのゲーム好きだから腕は……………どうなんだ?」

「そこは俺に聞かれても基準がわからねえよ……………」

「ハイハイハイ!!」

「あ……………てか何か流れで質問時間に入ってるみたいですけど……………」

「ちらりと先生の方を見ると何やら目を光らせつつサムズアップしてくる……………つてことは続けていいのか……………いいのか?」

「えつと……………それじゃその赤毛の人」

「あなたと!! 鳳は!!! どのような!!! ご関係ですか!!!」

「? 普通の昔馴染みだけ……………」

「あく……………シン、そいつは放つとけ」

「?」

「そうですか昔馴染み……………昔馴染みかあ!! (ふふふ……………私はあんまりだけど、これはあの人達にとって最高のネタ……………私達の部の運営資金会得のため…ふふふ、フフフフフ、ウツフフフフフ……………)」

……………どうやら余り……………いんや、絶対関わってはいけない人のようだ。

「初手でそんな質問しないでよね……。ともかく次、私でもいいかな？」

「ああ、気兼ねなくどんどん来てくれ」

「わかった。それじゃ……。アイドル活動に興味ない？」

「あん……。まりねえかな。そもそもそこまでカラオケに行くほうじゃねえし」  
「でも、時々は行くのよね？」

「まあ……。あまり上手くはないとは思うが」

「それなら、よかつたら今度一緒にいきましよう」

「いいぜ、後で予定が空いている日教えるから日程はそっちに合わせてくれ」

「次は私ね！なにか変身したいものある？」

「何するつもりだ……」

「え？いや、ちよ……と実験に」「誰が行くか、そんなもん」

「あう……」

「それじゃ次は……」

———質問地獄は結局一時限目の半ばまで続き———

「ハイ！質問はここまで！」

先生の一声に少しだけ『え〜』と言う不満そうな声が上がったが……

「まあまあ。また後で聞こうよ」

黒髪の（多分）狼の耳と尻尾を生やした女子生徒が宥めたことにより、その場は収まった。

「助かったわ、大神。それで……………」

「席なら空いてるところに座るのでお気にならさず。まず先生は授業の準備をして下さい」

「そう？それならお言葉に甘えるわね」

そうして先生が授業道具を取りに行くのを見送った後、俺は教壇から降り、空いている席に向かって一直線に歩いていき……先程から行儀悪く椅子に腰掛けながら腕を組みつつ目を閉じている、先の白上と同じ顔立ちをしているが色は真逆の漆黒の髪、耳、尻尾を生やした女子生徒の席の隣に座る。

「……………よろしく」

「……………」

その女子はこちらを一瞥こそしたがすぐに窓の外へ目を向ける。

まあ、こうなることを予測していたからな。さっきまでの地獄でこっちの精神力はへとへとだから下手にうるさくなさそうな人の隣に来たんだが……………正解だったな……………それに。

「……は窓際、寝放題だ……………」

直ぐ様机に突っ伏して、寝る体制をとり…………その意識をそのまま闇のなかに落としていく。

「……………おい」

しかし、意識が完全に落ちきる間際について先程聞いた声と同じ声音だが、そこに携えられた温度が真逆の音が隣から掛けられる。最初は別の奴に声をかけたのかとも思ったが……………

「……………おい」

同じ声で再び声をかけられ、俺に向かって話しかけられてることに気付き少しだけ顔をあげてその方向へと目を向けると、先程と同じ姿勢ながらこちらがわの目をうつすらと開き、そこから紅い瞳をこちらへと向けていた。

「……………編入初日の授業から寝るつもりなのか」

「……………気にかけてくれるのか？」

「……………違う。お前が目をつけられると私が寝れなくなる」

「……………なるほろ」

……………ふむ。

「……………おい」

「……………何？」

「……………何また寝ようとしてやがる」

「……………昼寝すんのは俺の自由だろ？」

「……………だから、お前が初日から……」

「……………それか、どちらも指名されなきゃいい」

「……………」

「……………」

するとここで俺の意図を察してくれたのか、ニヤア……と悪い笑顔を浮かべ始める彼女。そして……俺もきつと似たような笑みを浮かべているだろう。

「……………場所は隣の中等部校舎屋上、今日みてえに天気がいいと気持ちがいいぜ」

「……………いいね……どう行く？」

「……………ついてこれるのならついてこい」

「……………上等」

その言葉を皮切りに俺たちは己の鞆を掴みながら勢いよく同時に立ち上がり、そのま

ま並んで手頃な位置の窓を開いてそのレール部分へと足をかけると、丁度そのタイミングで先生が帰ってくる。

「お待たせ、それじゃさつそk……は？」

「……………つつうわけで」「それじゃあ先生」

「あでゆ〜」

「……………はい？」

そして、俺たちに先生が呆気にとられている隙に――

――三階にある教室の窓から飛び出した！

「なっ!？」

先生の驚愕の声とクラスメイト達の歓声をBGMにして俺は飛び出す瞬間に窓枠に引つ掻けた鈎縄をつたって降りて直ぐ様鈎縄を回収し、隣の席の女子は空中で何回転かした後に芝生の上へ上手く受け身を取りながらそれぞれ着地をし、二人して先生の負け惜しみ気味の叫びを背中に受けて、一度顔を見合わせ先程と同じような笑みを浮かべあつた後に二人して駆け出した。



……今つて授業中じゃねえの？

「……………もしもし……………ああ、今から頼めるか？……………今回は私ともう一人……………お、頼む。もしかしたら来てくれるかも知れねえからな……………ああ、頼んだぜ」

何処かに連絡を取り終えたクロは携帯を元のポケットへとしまい、こちらへと振り返る。

「うし。それじゃあ、さっさと行くぞ」

「その屋上とやらに？」

「ああ、付く頃にはきつと屋上は開かれてるから安心しろ」

「……………まあ、俺にはお前を信じるくらいしかねえんだけど」

そうして、歩き始めたクロの少し後ろをゆったりとついていく。

「にしても、驚いたぜ。まさか編入初日からエスケープとはな」

「勉強なんてのはある程度理解出来てやいいのさ。それに……………多分先生方にはある程度伝わってるだろうよ」

「つうことはお前も常習犯か」

「そのとおり。前いた所でもよく脱走して、脱走仲間同士でのんびり過ごしていたよ」

「だからあんなに手際がいいのか。つか、手際つつうかお前が使っていたあれ、何？」

「ああ……………これ？」



クロの質問にたいして、俺は右腕を捲つてそこに着けてある古めかしい鈎繩を巻き付けてある機材を見せる。

「おお、そんな風になつてたのか。……それで、それつて何だ？」

「俺のひいばーちゃんが元々昔の人の義手みたいなの作る人でね、これはそのうち残つていたものを新しい材料に変えた上に改良を加えたもん」

「ほお〜スゲエもん作る人もいるもんだな」

「だが……ま、今回使つたとき微妙に変な音したからコイツはもうご臨終みたいなんだよな」

「ちえ……それがありやいつもみたいにくそくそしなくても良くなると思つたのによ……」

「さすがにひいばーちゃんの技術を受け継いでる人がいねえ以上、新しく作るのは無理だし今日は元々さつさと窓から逃走するつもりだったから持つてきただけだ。……てか、いつもくそくそしてんのに何で今日は飛び降りたんだよ？」

「今日は教室で寝たままにしようかと思つていたんだが……有能な野郎が来たもんで急遽な」

話ながらカチンと腕につけていた物を外し、鞆から取り出したビニール袋の中に入れて口を縛つてから鞆の中に戻す。

にしても、何と言うか……ホントよそくどくりに一発で逝ったなコイツ。ばーちゃん  
の言った通りだったわ……クロの思う通り使った感じめちやくちや役立ちそうだっ  
たのになあ……………。

「やつぱり〜何か楽しそうなお話をしてるね〜」

「私達も混ぜて混ぜて〜」

「っおわあ!？」

すると、突然背後から少し間延びしながらも落ち着いた声とえらく訛った声が掛けら  
れ、慌てて振り替えると……

「び、ビックリした……」

「おう、おかゆにころねじゃねえか」

「やつほ〜黒さ〜ん」

「黒ちやんまたサボりなの〜?」

「またつて……おまえらもだろうが」

「だって仕方ないよ〜。退屈な授業よりもっとも面白そうな匂いがしたんだもん」

「二人ともなんだか凄いいことしてたよね〜。私もやりたいな〜」

そこにはクロから『おかゆ』と呼ばれた紫色の髪と同じ色の猫耳& a m p . 尻尾を持つ  
た、少しだるんとした雰囲気的女子生徒と、その後ろからびよこびよこ楽しそうに顔

を出したり引つ込めたりしている『ころね』と呼ばれた栗色の髪と、同じ色の犬耳&amp;amp;amp;amp;amp;mp;尻尾を持った元氣そうなつつうか元氣な女子生徒がいた。

「それで、君は誰〜？」

「あ、わ、わりい。…………ツフウ…………コホン、俺は鴻山龍神。今日クロのクラスに編入してきたんだ」

「へえ〜そ〜なんだ〜！僕は猫又 おかゆ、高等部の一年生だよ。そして〜」

「私、戌神 ころね〜！おかゆと同じ一年生〜！」

「猫又と戌神ね、よろしく。…………して、お前らもサボリ組か？」

「ん〜…………どうする、ころさん」

「そうだねえ……………このままサボっちゃおか！」

「よし！そうと、決まれば早速いくぞ〜！」

「お〜〜！」

「お〜！て、遠足じゃねえんだから…………」

なんつうか……………初めて会ったのにこの子ら二人セットじゃないと違和感を感じそうな程に仲良いな、普通犬と猫ってあまり仲良さそうなイメージなのに。……………ま、仲良き事は良いことだし、特になにも言う気はねえが。

\*\*\*\*\*

それから、猫又と戌神を加えた俺達4人は授業中で人気がない中等部校舎に忍び込み誰とも会うことなく最上階へとたどり着くかどができた。……………少し物足りないっちや物足りないが。ともかく何事もなくなるとどり着き、クロが屋上へと続く扉を開くと……

「おー」

真つ先に眼に飛び込んできたのは丁寧に管理されていることがよくわかる芝生。その後、少し見回してみると少し離れたところには日除けのパラソルがつけられたテーブル席が幾つか置いてあるのも見える。

「ほお〜！こりやいいな！」

「だろ〜？」

屋上の施設に感嘆していると、再び屋上の扉が開き3人組の男女が入ってきた、というかそのうち一人の特徴的な和風の服と額に角生やしてる女子はクラスの奴じゃねえか。

「お！姐御！お待ちしておりました!!」

「ぐ……姐御はやめてくれって」

「あ、姉さんだ〜」

「おはしいな〜おかゆところちゃんも来たんや〜。それと、初めて見る顔がいるけど、あ

れがさつきなきちゃん言つてた編入生？」

「そうだぞ！中々の逸材だ！」

賑やかになってきたな。

そんなことを思っていると、クロのことを『姐御』と読んでいた男子生徒が芝生の上に少し大きめのシートを敷き、そこに各々座つていき、菓子やら何やらをどんどん取り出していく。

「……………参つたな」

「ん？」

「俺、ゲーム機しか持つてねえや」

「今回は初見だからな、仕方ねえよ。ただ次ん時からは何かしらもつて来てくれると助かる」

「らじゃ」

「でもゲーム機持つてきてるのはいいねえ新人君。それで、機種は？」

「ホイッチとNZSP<sup>ニジサボ</sup>」

「NZSP!?!スツゴい懐かしいの持つてきてますね〜！」

たしかにそうだが……………今でも色褪せる事のないこと名作とか意外と面白いゲームが多いからまだまだ現役だと思ふんだが……………ま、とにかくまずは……………

「ゲームの話は一旦置いて……改めまして今日編入してきた高等部二年、鴻山龍神だ。おそらくサボりまくるからそこところよろしく。因みにクラスとしてはクロと……そこの綺麗な鬼の子と同じだ」

「余!?!」

「? 違つたか?」

「あ、いや違くないのだけど……」

「わあゝお……これはまた……」

「何だか、おかゆと同じ匂いがする」

「そう? でも自覚ある分僕の方がマシだとは思うけど……」

「……私はどうこいどっこいだと思うがな」

「うわあ、この人スゲエ……」

よくわからねえが……一つわかることは何やら呆れられてるらしい。おつかい  
しいな……俺は当たり前のことを言っただけなんだが……。

「とっ、とととにかく! 余達もじじっ、自己紹介せねばな!!」

「……そだね〜」

「それではまず俺からいきまます! 俺は中等部三年生の夏川なつかわ 千花せんかツス! こんな名前でも  
ちゃんとした男悪魔で、姐御の舎弟です!! 四露死苦!!」

「リアルで『四露死苦』って言う奴まだいたのか……………てか、クロの舎弟って…………」

「あく…………そこは深く突っ込まんでくれ」

「…………了解」

「ええ!!そこは俺の」「千花夏うるさあい!!」

(……………千花夏って?)

(アイツ、女みたいの名前なのに暑苦しくてな。それにたいしてアイツの妹みたいな奴が着けたあだ名だ)

(……………合うな)

(だろ?アイツはいいセンスしてるよ…………)

……………気になるな、その子。

「それじゃ次はあていしかな」

……………滑舌には突っ込まんぞ。

「あていしは高等部三年生、椎名唯華や。おかゆとは幼馴染みで昔っから一緒やねんな」

「うん。今日はしまってるけど、いつもは姉さんも猫耳生やしてるんだ」

「流石に学園じゃあ普通に過ごしてたい、いきなり猫耳生やしたらね」

「というか…………先輩だった…………んですか」

「敬語はいいよ。あていし堅苦しいのは嫌だし」

「わか……つた。呼び方とかはどうすればいい？」

「そこはご自由に」

「了解だ、椎名さん」

「あ、ちようど呼び方の事になったから話しておくけど僕やころねの事は名前呼びでいいよ。ねころさん」

「がぶっ……ほん!!」

「わかったが……ころねは食べるかしやべるかどつちかにしなさい」

何か静かだなと思ったら……菓子をリス……いや、ころねの場合はハムスターみたい  
に口一杯に頬張ってたのか。端からみりやかわいいが……俺らの菓子がほとんどねえ  
じゃん!!まだ話初めてから10分経ってねえぞ!?!どうすんのさ!!

「やく、やつぱりころちゃんの食べっぷりはいいね」

すると、椎名さんが自身の鞆から追加で菓子を更に追加で出してくれた。

良かった、これでまだ保つな。

「ハア……さて、後は余だけだな」

最後に俺の言葉に顔を真っ赤にして、今まで手であおつてその顔を冷やしていた鬼の子となる。



「余は百鬼あやめ、鬼神だ。そして……この子達は余の式神である『業』と『不知火』。余共々よろしくな、鴻山殿」

「おう。よろしく、百鬼。後……俺の事は龍神でいい」

「ほう?となる……鳳殿の言っていたシンというのは?」

「ただのあだ名」

「……なつなら、余もそう呼んでも……」

「ああ、別にいいぜ」

「チョッロ……」(お?お?新しいカプかな?) (チョロ余)

「そんなことよりお菓子美味しい」(こ、これは漢だ…!!)

何か照れる要素あるのかね。……ああでも、同年代の男子をあだ名呼びするってのは中々ないから緊張してるってことか?それならしゃあないか。

「あ、後余のことも……」

「ん?……ああ、そう言うこと。わかったよ、あやめ」

「~~~~~!!」

(コイツ……)(フフ、どうなるか楽しみや)

(何か既視感あるなあ)(お菓子ウマウマ)

(兄貴って呼んでもいいだろうか……?)

「あ？お前らどうし……っておい！ころね!!お前、菓子ほとんど一人で食ってんじやねえか!!」

「つくん……美味しかった♪」

「美味しかった♪じゃねえーよ!!」

「大丈夫だよ。ほら、まだまだお菓子はたくさんあるから」

「わ〜い♪♪」

「一旦ころねはストップ！せっかくみんな揃ってんだ、ちゃんと分けて食べような？」

「そっちの方が楽しい？」

「当たり前だろ？」

「ならそうする〜！」

……………なんつうか子供をあやしている気分だなあ…………。

そう思いつつ今度はおかゆが取り出した菓子を今度こそ、皆揃って食べ始める。その間も俺への質問メインの雑談を続け、澄みきった青空の元で俺達のサボタージュは続いていくのだった……



「フフフツ」

「?どうしたのよ、突然笑いだして」

「あつ、ごめんね。ちよつと——————」

——————面白そうな子見つけたんだ♪」

T o b e c o n t i n u e d  
a c t | l e n d

## START OF YOUR STORY, S a c t

## — 2

雑談という名の質問タイムを続けていた俺達だったが話題ができてきたこともあり、そのまま流れてホイッチのゲームをここにいる面子ですることになった……………なっただが。

「フフフフフフフフフフハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

「こ、このお……………」

「くううう……………」

「そんな動きじゃプロのころねは倒せないよお!!」

「甘い甘い!! 動きが甘いぜえ!! ハッハッハアツ!!」

「……………」

……………かんつつつぜんに暴走している人達がおるのですがそれは。つか、このゲームそのチーム色で塗った陣地の範囲の広さを競うゲームだよな? なんであんたら二人はリスクルしまくってんの? しかも……………」

「…………お前らいるところ以外ほとんどこっちの色で塗られてるってのに。」

「これは……流石にチーム分けが悪かったね……………」

「塗るの頑張ってる椎名さんが報われねえな……………」

「わああ!!……………だったら撃たないでやああ……………塗り返さないでやああ……………」

「いや〜それとこれとは別だから〜」

「せつせと一人懸命に塗り返していた椎名さんのキャラを俺が遠距離から容赦なくぶち抜き、がら空きになったその場所をおかゆのキャラが悠々とまた塗り返していく。」

「あ、今のでスペシャル溜まったから……………まあ撃つとくかあ……………」

「だね〜」

ゆる〜く話ながら容赦なくおかゆが空高く多数のミサイルを打ち上げ、そこからワントンポ時間差を開けて俺はその場から壁貫通の音響兵器?みたいなのを放つ。

「ハハハハハハハハハハハアツ!!やつべえつ!!逃げるぞころね……………つて!!これじゃ逃げられねえおうまじやべあああああああああああ!!!」

「わ〜クロちやあああああつあつあつあつ……………ふい……………危なきやわあああああああああ!!!」

「!!!!!!?」

「あああああ……遅いつてえ……」

「はあああ……たすかったよおお……」

甲高い悲鳴をあげる暴走していた2人のキャラはあえなく轟沈すると同時にこちらの味方……反応からして恐らく千花がやられる。

全体的には圧倒的こつちが有利だけど……後30秒、油断しない方がいいよな。

「あやめ！君はさっきのリススキル現場の上塗りを頼む！」

「わ、わかった!!」

「んし。それなら、今度はこつちから突っ込むぜ！おかゆ！」

「よしきた！いっくよ〜！」

ポチャンとインクに戻り、ある程度塗られている道を一気に突き進む。すると、すぐリスポーンしたクロのキャラと鉢合わせとなり、ひとまずボムを投げて牽制するところらの死角へと回り姿を隠す。それをみた瞬間、即座に振り返りメインウエポンをチャージさせ一拍置いてからインクを発射させると……

「何っ!?!うわ!!」

予測通り後ろからクロのキャラが現れるもインクの直撃を受け無事、倒される。

「お前ホントに初心者か!?!」

「ランクみれば分かるだろ……」

「だけど動きが明らかに素人じゃねえ!!」

「そりや……このゲームは初心者だけど、一応他のゲームもしてるからなつとー!」

クロとの会話をしつつ彼女が塗った所を塗り返していたのだが、突然頭上から降り注いだ大量のインクをギリギリのところまで躲すも、多少は喰らってしまう。

「くっ……」

「さっきの仕返しだよお〜!」

「千客つ……万来なつ……ことぞつ!!」

「くう〜!!なら……」

突如現れたころねのキャラの攻撃をギリギリのところまで躲す俺に業を煮やしたのか、ころねは至近距離でスペシャルを発動させ、空中に飛び上がる。

……だが、ここでそれは悪手だ。何せ……

「ころさん、も〜らい!」

「ひゃん!? もう! おカゆ〜!!」

「ごめんね〜、ころさあん」

飛び上がった彼女のキャラをその背後から現れたおかゆのキャラが撃ち落とし俺が事なきを得る。そして、それとほとんど同じタイミングで10カウントが入り始める。

「あ〜……これは無理やなあ……」

「クソツ！後もう少しこっちの方を……」

「ごめくん！リスポーンするのの後2秒〜!!」

「ん〜これなら勝ったね」

「だあな。つつても油断は禁物だが」

「何かあつたの？」

「少し前のマツチでちよつとな……」

まつさか、俺以外のキャラがほとんど同時にやられちまって流石に一人じゃ押し返すこともできずに逆転負けしたことあんだよなあ……。

「でも、流石に今回は大丈夫でしょ〜？」

「まあ……確かにな、現に今終わったし」

二人分の偉い悲鳴と共にタイムアップとなり、誰かが投げたボムが爆発し終えてからリザルトへと移るも、そこから見えるステージの色合いは完全にこちらの色がほとんどを占めていて……

「圧倒的だね〜」

「だな〜」

「余も頑張ったぞ!!」

「ああ、助かったよあやめ」



「~~~~~っ！」

「俺……全然ダメだった……………」

(……………なあ、ころね)

(うん?)

(これさ……龍の奴、一度ミオかロボ子とやらせてみないか?)

(……………確かにそうしてみると面白そう)

「……………」

何やらクロところねがこそこそと話してはいたが、結果は案の定俺達のチームの圧勝。そして、個人スコアは……

「……………ころさん？」

「……………クロ？」

「アツハハハハ……………」

クロところねがまさかの塗り点400ちよいでキル数が8……いやいや、普通そりやないでしょ？それってつまりは塗りをほとんど全部、椎名さんがやったってことだろうが。……………まあそれを言うなら、こっちのチームの千花は同じくらいの塗り点で0キルという散々な結果に終わったってことに比べたらマシなんだろうが。

「……………なあ、シン」

「どした、あやめ?」

「お主、ホントに初心者なのか?」

「最初から言ってるだろ、このゲームはここ数日前に始めたばかりなんだって」

「……………そのスコアでか??」

……………疑いたくなるのはよう分かる。そりやここ数戦、ほぼ確実に勝利チームにて、キル数も大方5以上をキープしてりやそうも思うか。

「……………ま、似たよくなゲームを幾つかしてたからつてのもあるがな」

俺があやめにそう返すのとほとんど同じタイピングで……………恐らく四時間目の終わりを告げるチャイムが聞こえてくる。すると、静かだった学園がにわか騒がしくなってきた。

「昼や「うおっ!?!やべえっ!!」びっくりしたあ……………」

「あ……………頑張つてね千花夏」

「すんません!!ちよつと行つてきます!!」

椎名さんの一言からして……………あれか、どの学校でもある購買部闘争か。この広い学園からしたらその規模もものすごいんだろうな……………俺は行く気はねえけども。

そうして、急いで鞆にホイッチを片付けた千花夏はその鞆をひつ掴んで勢いよく屋上を飛び出していく……………事故らないといいんだが。

「龍は行かなくていいのか？」

「俺は自作の弁当があるから大丈夫。そういうお前らこそ大丈夫なのか？」

「うん。僕はこのおにぎりがあるから」

「私もこのパンがあるよ」

「あていしも行きがけにころねの家のパン買ってきたから大丈夫や」

「余も弁当があるから大丈夫！」

「私もこの通り。にしても、お前自分で作ってんのか……すげえな」

「ま、今日が当番だからってこともあるんだがな」

「？」

不思議そうに小首を傾げるクロにそう返しながらゲーム機を鞆へとしまい一度立ち上がって伸びをしていると屋上の扉が開いて今朝、俺を案内してくれた天音と紫髪をツインテールにまとめ、耳が生えてると思わせる黒色の顔のついた帽子を被った女子生徒がやって来た。

「こんにちは。千花夏が爆走してると思ったら………やっぱり皆様お揃いで」

「やっほ、トワも来たんやね」

「よ、天音。今朝ぶりだな」

「へ!?!せっせ先輩!?!」

「?どうしたよ、そんなに慌てて」

「……シンはかなたと知り合いだったのか?」

「いや、今朝方ちよつとした縁があつてな。天音に助けてもらつたんだよ」

「そういや、あん時郡道先生大慌てでチャリを走らせてたな……理由はお前だったのか」

「あくあれは轢き殺されるかと思つたよ」

「実際に連れ回された時には死んだかと思つたぜ……………」

おお……………思い出しただけでも身震いしてきたな、もうあんな経験はしたくねえ……………。

「ふ〜ん……………なるほどね。あんたがかなたの言つていた「わ〜〜〜!!  
わ〜〜〜!!」トワそれ以上は言つちやダメ!!」フフツツ、分かつたよ」

あれれえ〜?おつかしいぞ〜?!(某小さくされた探偵風)天音はクールな性格をして  
ると思つていたんだが……………。

「にやはは。シン、かなたんはね〜ほんとはスツゴい恥ずかしがり屋なんだ〜。それで、  
それを隠すためにクールな性格をえんじていたんだよ」

俺が不思議そうな顔をしてるのに気づいたのか、おかゆがニマニマとしながら訳を話  
してくれる。

……………なるほどねえ、恥ずかしがり屋さんだったのか。それなら朝の態度も頷ける、初

対面でしかも男となればああもなるわ。……………そうなると腑に落ちないのは最初に話しかけてきたことなんだが……………ま、そこは生徒会役員としての義務としてつてところか

「照れてるかなたんは物凄くかわいいよ」

「それはあるな、小動物みたいだ」

「ひにゅ!!」

俺の一言に今朝のように体を固めて顔を真っ赤にする天音。それをみた隣の少女は肩を震わせて顔を俯かせる……………笑ってるなあれは。

「シン、シン」

「?どした、あやめ」

「余は?余もかわいいか?」

「あやめか?あやめは初めて見たときは綺麗な奴だなとは思ってたが、話してみると可愛らしかったぞ」

「そう……………か!そうかそうか!!」

(……………うーん、やっぱりおかゆと同じ匂いがする)

(だな。しかも、本人に自覚がないから質が悪い)

(カプ厨としては新たなカプが生まれそうで嬉しい限りや♪)

(どうなるか楽しいだな)

嬉しそうなあやめの後ろで、ひそひそと顔を寄せあつて何やら話し込んでいるクロ達  
………一体何の話をしてるんだらうか、とぼんやりと思つていたその時だった。

「お前かあああ!!!」

突然のんびりとした空気を吹き飛ばすように、屋上の扉が勢いよく開かれると共に一  
人の男子生徒が飛び込んできたと思うと、一直線に俺のところまでくると……

「おまえがはかいしやがったのかこのやろうさいごのまともなやつをぶちこわしやがつ  
てどうしてくれるんだこのままじゃおれがこわれちまうだつてきいてくれよほかのやつ  
はぼうそうれつしやだしめんへらだしかいわとちゆうでわりこまれるしてんねんほわ  
ほわおひめさまだからつよくあたれないからこいつがさいごのまともなやつだったん  
だそれをこわしたおまえはせきいんとつてほしいというかとれつつうかどつてくだ  
みさいというかとりやがれええええええ!!!」

「何これ修羅場?」

「いやいや違うだろ……というかコイツのコレはいつもの発作だ」

………なんだコイツ? 怒つてると思いきや途中で泣き言を挟んでやがるし、結  
局何か怒つてるし……つか、そもそもそんな早口で言われちゃ半分くらいしか分かん  
ないって。

「あく……取り敢えず落ち着け？」

「これがおちついていられるかってのさおれいがいのゆいいつむにのまともなやつがこわれたんだぞどーしてくれるどーしてくれるこのままおれをつぶすきかてめえそれだけはやめろやめてやめてくださいなんでもしますからあああああああああああ!!!」

「だっから、怒ってんのか泣きついてんのかどっちなんだっての……………」

「ぜんぜん落ち着かないね」

「呑気なもんだな……………」

「そーいうシンもだけど……………」

「俺自身こーなる人は初めてじゃねえし……………ここまで壊れてるのは初めてだが」

「こーいう人を見るのが初めてじゃないってことに驚きだよ」

「……………こーなる原因に心当たりがある。そして、今めちゃくちゃ嫌な予感かしてる。てーか、どうすんのさコレ？」

「ごっごめんなさい!ごめんなさい!!」

「……………本当にごめんなさい……………」

「あく……………いや、天音と……………まだ自己紹介してねえじゃん……………ともかく、紫の子が謝ることは「えと、そのメンヘラってのは多分私」え!?お前なんっ!」

マジかよ、この子結構まともだと思ってたわ！……………いや、この子はメンヘラかも  
しれないがまともだ、うん、まともだ。

「あく……………ともか「おいきいてるのかいやきいてく」ちよと、うっさい」  
「ぱっ……………」

あまりのうるささとしつこさで、思わず反射的にヘッドロックをかけ一瞬で意識を刈  
り落としてしまう。

「おつそろしく早いヘッドロック。私じゃなきや見逃しちゃうね」

「……………あ、やべ」

「気にすんな、気にすんな。もう少し遅けりや私がぶん殴ってた」

「いやいやいやいや……………流星に殴っちゃダメだろクロ……………」

「……………でもいやに素早く落としたね……………」

「コツさえつかみやあ意識を落とさせるくらいなら案外造作もないぞ」

「あ、それならころねにも教えてほしい！」

「私にも教えてくれ。うざったい奴に使いたい」

「後でな〜」

「ん。こつちは式を飛ばして必要な者を呼んでおいたぞ」

「サンクス、あやめ。つしよ……………天音と紫の子、悪いが氷水持ってきてくれ」



「ん。……ここはバケツに入れてくればいいのかな？」

「いやいや、普通に枕みたいなのとか袋に入れてあるのでいい」

「わ、わかりました。すぐに持ってきます！」

意識を無くした男子を担いで日陰に移動させつつ、氷水を天音達に持ってきてもらうようにお願いする。

あああ………こりやめんどくさいことになったな………まくさか、こんなところで再会することになろうとわ………。

\*\*\*\*\*

それから天音達が持ってきた氷水袋を額にのせて日陰に寝かした先程の男子………天音曰く中等部生徒会副会長、白氷那しらひな 恋護れんごとやは一度そのまま放っておくことにして、彼がぶつ壊れた原因を待つ。その間に先程天音と共にやって来た紫の子………メンヘラらしい常闇トワと自己紹介を済ませる。………いや、やっぱりこの子、しっかりしてるわ。

「………まあ、でも私は生徒会役員じゃなくてよく生徒会室に遊びに行つて、喋りまくつてるだけなんだけど」

「ああ……」

なるほど？ そうなるとあれは願望か、来るなら手伝ってくれって言う。

「にしても……天音、あまり体調良くないのか？ さっきの白氷那の話じゃ様子がおかしいとか言ってたようだが……」

「へ!? いったいいえ!! 私は大丈夫です!!」

「そうか？ それならいいが……お前も大変だな。アイツの補佐なんて」

「はは……その分、私がしつかりしなきゃっていう自覚を持てるんですけどね」

天音は生徒会じや書記に加えて会計も担っているそうだ。……もう二人の子は知らんがそりや白氷那の暴走する気持ちもわからなくもないな。これだけしつかりしている子が唯一の安全地帯オアシスになりうるし、この子がダメになったときそれは生徒会の崩壊を意味しそうだ。

「そ・れ・で・く……あていし、シンくんに聞きたいことがあるのやけど……」

「おう、どした椎名さん」

「単刀直入に行くで？……会長とはどんな関係なんや」

「簡潔に言えば……おs「いいなずk」そう思ってるのはテメエだけだあ!!」「アウチ!!」

「ああ!? また扉の修理費が………っ!!」

椎名さんの質問に答えようとした最中、ついに白氷那が暴走する事となった元凶が屋

上の扉を文字通り吹き飛ばしながら現れておかしな事を宣ろうとした瞬間にその顔面に拳を叩き込んだ!

「ツタアアイ!!何すんデスカ!!WHY!!」

「おっ前なあ…!!昔から言ってるだろう!もう少し落ち着いて行動しろて!!!つうか扉を蹴破るな!!」

「……………なるほど、幼馴染みと」

「ああ……………ま、そんなところだ」

「でも、お前…鳳が幼馴染みじゃなかったか?アイツは…………」

「ええつと…………どつから説明したもんか……………」

「もしかして……………先輩って桐生組の関係者?」

「お?それじゃお前からこの暴走野郎の親父さんのこと知ってるのか?」

「学園だと有名だよ。ゲームの主人公と同じ名字の組でヤクザだけでも社会に貢献していることで有名な桐生組の総長の娘さんってことで」

「……………そこまで知ってるならいいか。俺の親父とその総長…………ココの親父さんが親友でね、当時はヤクザってのが悪いイメージが強かったからあまり公言出来なかったけどよく会っていたのさ」

「なるほどねえ…………」

殴られた鼻頭を抑えて大袈裟に痛がる、頭に一对の角を生やしたオレンジ色の髪をした長身の女子生徒、そして、白氷那が壊れた元凶……桐生ココとは昔何回か会ったことのある妹みたいなもんだ、身長は抜かされたが。

「イヤ〜でも、久しぶりにMy Brotherの拳を受けましたが……Goodデス!!」  
「……………会ったときに何してたんだ…」

「喧嘩教えた」

「……………へ？」

「だから……喧嘩教えた」

「そうデス! My Brotherはワタシのシショーでもあるのデス!!」

「……………もしかして……………」

「おかゆ、違いぞ? 俺はここまでしろとは言ってねえからな?」

当時はその喋り方ゆえにいじめられて泣いてて、そこで俺が喧嘩作法みたいなのを教えたところ……あっちゅうまにどの方面にも喧嘩を売っていく暴走機関車に……………んんっ? これ、俺が原因か?

「こんにちは、何だかまたココが爆走していたからついてきちゃあれ? 知らない人がいるのら〜?」あ……………る「お? センパイたち、こんにちはなのだ!」え、えと……………ろ「うっひゃあ!! 何か鬼太郎みたいな人いるよ!!」だから……………ま「ダメです、みんな。わた

めが、話してる……ます」あう……………」

俺が頭を抱えているとココの後からもう二人、片方は流れるような金髪にココとは違う形……おそらく羊の角を頭に生やした女子生徒と、その女子の話途中で叩き斬って話しかけてきた小さな冠とあめ玉の髪留めが特徴的なピンク髪の女子生徒と、頭に小さな角と背中に小さなコウモリのような羽、そして、先端が特徴的なスペードの形をした尻尾を生やした赤い髪の女子生徒と、褐色の肌に白いシヨートの髪をした活発そうな女子生徒、最後に特徴的な尖った耳をもった拙い言葉遣いの男子生徒がひよこつと連なつて顔を出したと思うと、赤い髪の子を先頭にそのまま俺を取り囲んでワイワイとし始める。

「お！おにいちちゃんなのだ！どうしてここにいるのだ〜？」

「何々？ロアのお兄ちゃんなのか!？」

「でも〜悪魔じゃないよ〜？」

「あなたは、一体、なに……ですか？」

「つとと、ハイハイ一旦落ち着いてくれ。まずロア、俺も今日からここに通うことになったんだ改めてよろしくな。それで他のお三方とその君は初めまして、本日編入してきた高等部二年、鴻山龍神だ」

「あ、はい！角巻わた「姫森ルーナなのら〜」「あたしは葉山舞鈴<sup>マリリン</sup>！」「僕、ティーダ・プ

ルフィミナ」「お〜！よろしくでよ〜！」……わためです」

……えと、何だ？この角巻って子は話す度にその途中で被せられるのが当たり前なのか？

「ハツハツハ！流石はクソザ」「お前も、もうちよい、黙つとれい」へぶつ!!」「すつご……扱いが手慣れてる……」

「というか、お前らまで来たつてことにびつくりしたわ……昼飯は？」

「まだ、これから、皆、食べる、とこ、黒お姉さん」

「それなら皆で食べようよ〜」

「それは〜とつてもいいお話なの〜」

「ころねのパンは誰にもあげないよ？」

「ころさん、誰も取らないから安し」「天音……と言つたか？君は同志かな？」

「ええと……百鬼先輩ですよね？それで、同志つていうのは……」

(ゴニヨゴニヨ)「!!同志です」

「なら、同盟を結ぼう」

「何か変な同盟できてんだけど……？」

「むあ、ふふいんびえびあい？(まあ、いいんじゃない?)」

「……………一気に賑やかになったな。後、葉山だっけか？喋るならしつかり食べてから

喋りなさい?」

「皆楽しいならいいことなのだ♪それよりもおにいちちゃん、いつものお願いしてもいいのだ?」

「ん?ん?……今日は店には来ねえの?」

「今日はパパとママと一緒に過ごすからいけないのだ?……」

「そうなのか……。つと、わかつたからそんな悲しそうな顔すんなって、それじゃ俺が悪いみたいになっちゃうだろ。ともかく……。ほら、おいで」

「わ〜い!!」

「っ!!?」

「おう、これはまた……」

ちよこちよこことこちらへ来た先程の赤髪の子……夢月ロアを、胡座をかいた俺の足の上に座らせてから弁当を開こうとすると、何故か俺の左右には天音とあやめがすぐさま陣取る……。しかも、かなり距離を詰めて。

「いや……。こんだけ広いシート敷いてんのに何故?」

「いえ!先輩は気にしないで下さい!」

「余達が好きでここに座っただけだから!」

「……………まあ、いいけどさ」「でよ〜♪」

それ以外の奴らも各々好きな様に腰を下ろし、それぞれ自分の弁当を食べ始め「お兄ちゃん♪お兄ちゃん♪この唐揚げほしいのだ〜♪」こらこらロアや？割り込むんじゃないよ、これじゃどこぞの羊じゃないか。……………コホン、ともかくそれぞれ己の弁当を、皆で称賛しあいながら賑やかに昼休みも過ぎていくのだった……

「……………はっ！俺は何」「その唐揚げはアタシのモノデス!!」「へぶれっ?!?」「ココ〜？なにもまた副会長君気絶させてんだ？それと、残念ながら唐揚げは売り切れだ」「W H A T !?!?」  
 「おいひい…………」「こんな唐揚げ初めて……………」「ん〜♪この味がいいんでよ〜♪」



その後は何事も……………なくはないな。ようやく意識と正気を取り戻した副会長には土下座で謝られたし、千花夏はコッペパンを10本買ってきたし（大方の予想通り買物戦争に敗北したそうな）、俺の回りに集まった連中は俺の弁当の取り合い始めたし、そこにロアの友達三人も集ってえらいことになったし……………とにかく退屈しないランチタイムを取った後、俺は今……





……片方は金剛の様子からして仲の良い友人といったところで、確かこの特徴的な髪色で零斗せんとっていうと……

「……まさか戦場せんじょうヶ原がはら 零斗れいと？」

「そうそう。小学校振りだね！」

「マジか！久しぶりだね〜！」

「旧友なのか。して、先程の口振りからして、我が崇高なるアイドルを早くも把握しているようだね」

「ん、ああ……自己紹介の時に『アイドルやらないか？』って聞かれたのが印象に残ってたんだよ」

「ほほう？……まあ確かに口は悪めだが良い容姿をしておるな、目をつけられるのも無理はない」

「……荒れるかと思ったがマトモみたいだね」

「ハハッ、確かに彼女は我らの崇拜すべき存在。だが我々は彼女が悲しむことはしないのが心情さ」

「誘われた……？」

「零斗〜？今は行くなよ〜？」

「あつと……ごめんね」

「はあ……その妄想癖……相変わらずだなあ」

「旧知の仲を改めるのもいいが……そろそろ自己紹介させてもらおうか。私はその派手な奴の友人の未来川あすかわ 麗鵝らいていだ」

「つと、俺も自己紹介が遅れてすまねえな。俺は鴻山龍神、その無駄に元気な奴の幼馴染みだ。零斗もだが、俺の事は龍神とかコイツみたいにシンって呼んでくれ」

「ちよ……お前ら、俺の扱いちよつと酷くないか？」

「別に外れてないだろうが（でしよ）（だろ）」

「……………ええ………てか、零斗もかよ……」

大袈裟に肩を落とす金剛を横目で見た後三人で顔を会わせてから少し笑い合う。そうしている内に会場のボルテージは更に上がって数人は顔を真っ赤にさせながら叫ぶほどとなっていた。

「うお………すげえ人気だな」

「当たり前だ、これこそ星街すいせいちゃんの力さ」

「星街すいせい？」

「あの子の名前だよ。本名をそのままアイドル名にしてるんだ」

「なるほどなあ。………ただ、これ授業どうすんのさ？まだまだ終わる気配ねえぞ？」

「それについては大丈夫だ。今日水曜日は『すいちゃんデー』と言ってな、すいちゃん

の予定が合えば五時限目を占拠してライブを開催しても良い事になっている」

いやいや凄すぎるだろ。学校あげて応援に回るとh

「因みに、この方針は私が次期生徒会長としてのありとあらゆる力をもつて強引に押し通した」

ごり押しかよ!!てか、お前が主犯でしかかも、次期生徒会長かよおお!!

「ホント、よく許可してくれたよね〜……」

「だな……」

「普通通らねえよ、そんな案……。てか、金剛」

「何?」

「俺はそもそも話、何でここに連れてこられたんだ?」

「ああそれな。実は……」【あ! 鳳く〜ん!! 連れてきてくれたかな〜??】……つつうわ

けだ。おう!! 呼んできたぜ〜!!」

【ありがと〜!!!!】

「つあ〜………呼び出されたのか。………しかも、こんなに大勢の前に」

「すいちゃん恒例の通過儀礼だね。ま、死にはしないから大丈夫だよ」

死にはしないからって……何かしら痛い目にはあいそうな風に言うなや。しかもさ

……

(おい、あの男か?)

(ああ、アイツが噂の編入生だ)

(良いルックスをしてやがる……しかし、それがどうしたって言うんだ)

(下手なことをすればクロス)

(良いことをいったな君、俺も手伝おう)

(よし、我も協力するぜよ)

(汝に力を授けよう)

(((((お前、何様だよ!!)))

(我、崇高なる我らがアイドル、星街すいせい様に宿りし守護霊である)

(((((その力、喜んで受け取ろう))))))

さつきから目の前の集団全員の視線がこちらに向けられてて、そのひとつひとつが突き刺さるほど痛いんだが? てか、ホントにこれ下手なことをしたら死ぬよな? 殺されるよな? 打ち首晒し首は確定だよな? ……なんか途中で変なコントが聞こえてきたが……そこには突っ込まないでおこう。

「……………行かなきゃダメ?」

「逆に行かないのならここで君に我が<sup>スターフィンク</sup>星詠み会の精鋭達を仕向けるが?」

「……………行けってことか」

「理解が早くて助かる」

はああ……………あんまりこういう大舞台は立ちたくないんだが…………。

天井を仰ぎ見つつ、ちらりと俺の事情を覚えているであろう金剛の方を伺うとニヤニヤとした顔だったが、その瞳には少し真剣な色が入っている……………そんな気がした。

「……………なるほどなあ」

金剛の真意に気づき、誰にも聞こえないほど小さく呟く。実際少しざわついていた体育館内ではその呟きは、その淘汰に吞まれていった。それから顔をあげステージ上で首を少しかしげている感じの星街に向かつて軽く左手を振るい『これからそっちへ行く』という意味を込めたジェスチャーを送り、一度大きく深呼吸を挟んでからゆつたりと歩き始める。

「……………つ」

……………昔程じゃないが……………やっぱりまだ、こういう所……………人が両隣に塀を作っている所を歩いていくと、嫌なもん思い出すし……………そのせいで、気持ち悪くなるな……………。

「フ……………」

だけでも、このくらいなら、平気だな。

\*\*\*\*\*

「……アイツ、少し様子がおかしくないか……?」

「……昔より少しはマシか」

「……金剛くん……まだ、シンくんは……」

「……ああ。だけど、あの時よりかはまだました」

「金剛。シンは一体どうしたんだ?」

「……わりい、麗鵝。お前でもまだ話せねえ……」

「……そうか……ならば、聞くまい」

「……ありがとな」

\*\*\*\*\*

……あゝ……そこそこ疲れた……。

人垣を通り抜けなんとかステージまで拳がり、ふり返ると……

「……うお」

そこにはいつか見たような人の山……あの時とは俺の状態とかも違うから大丈夫つちやあ大丈夫だが……それでもちよつとキツいか。

「圧倒されてる?」

「……流石にな」

「キツいのなら戻っても……」

「……………戻ったら死が待ってそうだから大丈夫だ」

「アハハ、それ逆に大丈夫じゃないよ」

俺の顔色を気にして、少し心配そうに小声で声をかけてくれた星街に半分冗談で半分本気の言葉を返すと、彼女は安心したかのように軽く笑ってマイクを持ち直す。それを横目で見ていた俺ももう一度深呼吸して気分を落ち着かせてから、一応星街の少し斜め後ろに立つ。

「はい！それじゃ紹介するよ！！今日私のクラスに編入してきたばかりの鴻山龍神くんです！！」 「はい、どうぞ」

「え？ちよ【おま……………あつと……………スウツ……………ツと……………ご紹介に預かりました、鴻山龍神だ。……………まあ、よろしく】……………いきなり渡すなや、びつくりしたわ……………」

「えへへ、ごめんね【鴻山くん、ありがとー！きてきて編入生君を紹介したところで、今日のお歌のコーナーはおしまい！！次は？】……………鴻山くんてゲーム機持つてる？」

「あー悪い。あるっちゃあるが今教し……………「へい、こちらに」え、天音？」

なぜか真っ黒い……………いわゆる黒子の姿に今日はやけに見える羽根を生やした人が、何故か俺の鞆を恭しく捧げてくる……………というかもう声で分かるって、お前天音だろ。何でここに……………あ、いやまで、そういや、生徒会の腕章つけてたわ。……………いや、だからって俺の鞆持つてんのおかしくない？



「……………じゆうで「充電完了しております」……………アツハイ」

充電もしてあるとかもう逃がさない気マンマンじゃねえかよ！

ああ、もう……………正直言つて、ここじゃゲームやりたくねえんだよなあ……………けど……………。

軽く肩を竦めてから黒子天音から鞆を受け取つてそこからホイッチを取り出して、星街に向けて『いいぞ』と合図を送る。すると、満面の笑みとなつた星街がパチンと指を弾くとステージ上部からめちやめちや大きなスクリーンが2つスルスルと降りてきて、それと同じくして俺達の近くにはホイッチのゲームスタンドをのせた大きなテーブルとモニターが用意されていた。

【「お待ちかね!!私!!そして今日は彼とも!!ゲーム対決の時間だよー!!」】

「……………用意周到なこと……………。それで、プレイするゲームは?」

「お? 以外に乗り気かな?……………ゲームは「テトリス99」」

「つてくと、お前とここにいるやつらのうちの97人か」

「うん♪それで対戦方法は1VS1VS97」

「つっても、恐らく1VS98か……………」

「アハハッ!それはそれで面白そう♪」

「面白そう……………というか、俺が地獄見るだけだわ……………」

……  
「………つたく………やる気にさせてくれるぜ。あんまり得意なゲームじゃねえが………」

「………先にいっておく。………俺は売られた喧嘩は買うタイプだ」

「………へエ………？」

「………全力でやってやる………だから、覚悟しろよ？」

俺の言葉が近くの奴らに聞こえていたのだろう、小さくざわつき始めたと思うと、それはすぐさまこの会場全体に広がっていく。そして…そのざわつきは非難とか、いらつきのものではなく………

“何やってんだ”という焦りと混乱の声。

そういう反応からして、このゲーム………星街の十八番だろう。

「それなら………せいぜい、私を楽しませてね？」

「おくおく………大きくでるなあ………」

それだけ自信あるってことか………

「………ま、こつちも負ける気はさらっさらねえがな。」



「アツハハハハハツ!!結局アイツの本性何一つ変わってねえわ!!」

「……………ハア、聡明な奴かと思つたが……………気のせいか」

「アハハツ、それは違うよ〜」

「と、言うത്?」

「アイツはな〜確かに基本的にローテンション気味な奴さ。んで、口は悪いし、サボることには全力を注ぐ上級サボり魔d」それは僕らも言えることだけどね〜」零斗は少し静かに、今からいいこと言うんだから」

「……………それは自分自身で言うな」

「うっせ。ともかく、アイツは上げれば切りがねえ程色々やってるわけだが……………それ以外はアイツはすげえんだわ」

「お前がそこまで手放しで誉めるとはな……………それほどののか?」

「ああ。俺はアイツに今まで一度たりとも勉強でも運動でも勝つた事はねえ」

「中間や期末でも上位常連のお前がか!?!」

「僕も結構、勉強教えてもらつてたんだよね〜」

「お前は何時もだつただろうが。……………そして、アイツにはな勉強や運動よりも更に得意とするもんがあつてだな……………」

「……………まさか……………!!」

「ククツ、お前が思った通りさ……………」

「……………アイツ、俺の幼馴染み……………鴻山龍神は

「……………ゲームをやらせりや天下第一品だ

……………ま、今回のテトリスとか、ぶよぶよとかはあまり得意なジャンルじゃねえから勝てる確率は低えだろう。だが、アイツは早々簡単に負けるようなタマじゃねえし……………何より星街が少し油断してるのが不味いかもしれねえな。だがどちらにしても……………」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「も〜！クロちゃん何〜？私昨日の徹夜分この時間寝たかったのに〜！」

「そもそも徹夜をやめろ！同じ家で寝てる私の苦労を少しは理解しろ!!」

「でも……………フブキはともかくどうして私まで?」

「うーん……………簡単に言えば有能株の紹介?」

「ゲームズに取り入れると面白そうだよ」

「まあ、少し待てよ……うし、間に合ったか」

「んも……あれ？ ステージにいるのって、すいちゃん………鴻山くん？」

「え？ もしかしてこれからせいせいとテトリス勝負!？」

「わお、いきなり凄いことに」

「にやあつ!?! いきなりそれはキツイよ!!」

「ハハハハハ！ やっぱりそういう反応するんだな！」

「予想通りでちよつとつまらないなあ……」

「いやいや、おかゆはフブキに何を求めてるのさ……」

「と、止めた方がいいんじゃない?」

「残念だがもう止められない、止まらない。だがもう少し待ってろ、きつ

と—————



「ふい〜」

「お疲れ様」

「うん……」

「どした？えらく不安そうじゃないか……………たの」「ハイハイ、レンは暴走しないでくださいネ」

「……………誰のせいだと……………」

「どうどう……………落ち着いて？……………それで、何か不安な事があるの？あなた」

「うん……………テトリス勝負であそこまですいちゃん先輩に張り合おうとするなんて、無謀すぎないかなって……………」

「確かに……………テトリスってせんば」「フン！あなた達は会ったばかりだから知らないのは当然デスガ、MyBrotherなら大丈夫デス！」

「ええ……………どつから来るの、その自信……………」

「そりやMyBrotherの実力を知ってるからデス！確かにすいせいパイセンの実力だと厳しいゲームにはなりマス。けどそれは逆に……………」



「ちよちよちよ!?!何やってんスカあの人!?!」

「あはは……………よりにもよってすいちゃんに勝負……………というか、喧嘩売っちゃったね」

「うっわ……………命知らずというか、無謀というか……………」

「うゝむ……………そうとも言えないかも」

「どうしてさ?」

「実は、さつき余も彼と対戦したんだけど……」

「そーいや、あやめちゃんも午前中丸々サボってたもんね」

「……ん? そうするともしかして椎名さんとかおかゆもいたの?」

「? いたけども……」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!! あていしも行けば良かったあ!!」

「いや……去年の成績見るにあやめは大丈夫だけど、あんたはサボっちゃ不味いでしょ

……」

「「確かに」」「あはは……かくゆう余もそんなに余裕があるわけではないけど」

「うぐう……そこを突かれると痛い……」

「にしても、あやめちゃん半日だけでよく分かったね」

「ミオちゃんやフブキちゃんみたいな強い人とは何度か対戦してるから、その感覚でなんとなく……」

「………つてか、そういう先輩も詳しそうツスね」

「だって……私も彼の幼馴染みだもん」

「「「え!!」」」

「でも、彼は私がここにいるとは思わないと思うなあ。最後に話したの小学生の時

だったし、それ以降連絡も取り合っていないから」

「お、これは感動の再会かな？」

「あはは……そうとも限らないかも。ただ、今ひとつ言えることはね  
 ……………」

「……………」この対戦、きつと面白いことになる(ね)(かも)「」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ホイッチをスタンドに差し込んで起動させ、暇潰し用にいていた「テトリス99」を立ち上げる。すると、巨大スクリーンにもその映像が投影され、早くも歓声が上がりはじめ。

「……………」

大丈夫。今はあの時とは違う。

少し荒れ始めている心を落ち着かせていながら、先程星街に示されたこのライブ専用回線から対戦ルームに入ると、俺が最後だったらしくルームが満員となり、対戦開始ま



でのカウントダウンが始まる。

……さて……それじゃ

「……………行くとしますか」

……  
そう呟くのと同時にスタートの合図がかかり、すぐさま俺はステイックを弾いた  
……………

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「そらちゃんに気になる子ってあの子？」

「うん♪」

「え、なんだか冴えない感じ男の子だよ？」

「そうかな？ かいちよくの言う通り、面白そうな感じがするけど」

「ロボちゃん、分かってる」

「いえ」

「……ふむ、しかし……初日から半日授業をサボっていたらしいぞ」

「私もその話は聞いているわ。でも、それ以上に彼の成績が良すぎて先生方もあまり口出しできないようね」

「……うえ、そんなにいいの？」

「聞いた話では、そらですら達成できなかった学園設立以来初の試験オールパーフェクトで編入してきたらしい」

「オールパーフェクト!?!」

「そ。彼……………」

「鴻山 龍神は本物の天才なのよ」

a c t | l e n d

T o b e c o n t i n u e d

## START OF YOUR STORY, S act

— 3

———。おーい！起きろー！

「……んあ？」

金剛の声に呼び覚まされ、突っ伏していた机からゆつたりと頭を上げながら目を開く。すると、もう既に帰りのSHRが終わってしまったのか教室内にあまり人は残っておらず、何人かが固まって雑談をしているくらいだった。

「んんん………六時限目丸々寝てたか……」

「そうだぞ？特にセンセも干渉はしてなかったけども、少しピキピキしてたな」

「流石にあの後だったんだから大目に見てくれたのか、助かったな」

「初日から半日エスケープ決め込んだ野郎が何言ってやがる」

大盛況だった五限目と昼休みを使った星街とのテトリス勝負、あれの疲れがなあ………。悔しいことにあと一步叶わなかったが……それでもアイツのテトリス捌きはなんだろな、まるで先の先まで読んでやがるような積み方してるしこっちが送つても

すぐに返されるし……ともかく破格に強かったな。あれなら世界でも通用しそうだな、

うん。

「あふっ……」

「……流石にお疲れか」

「あの勝負の後なんだ、堪忍してくれえ……」

「いやいや、すいちやんのテトリスに四十分近くも耐え忍ぶなんて偉業を達成したってだけでもすげえっての」

「………しっかし、悔やまれるのはあん時棒の設置をミスらなけりや……」

「あつつつつい変わらずすげえ負けず嫌いなことで……」

仕方ねえだろ、そういう性分なんだから。

「ま、ともかく帰ろうぜ！こっちに來たのなら一度は寄るべき、とっておきの店があるんだよ!!」

「……ホントか？」

「おお！ホントもホントよ！」

こいつがこうやって手放しで褒める店……これは期待出来そうだ。

机に寝そべらせていた上半身をゆっくりと起こしたあと、大きく伸びをする。それから机横にかけて合ったカバンに教科書やらを放り込んでから立ち上がり、金剛と共に教室を後にする。

「因みに、どんな店なんだ？」

「ふっふっふ、それは行つてからのお楽しみだ！」

そりや楽しみなことで。

そうして、二人で談笑しているところに零斗と麗鵝も加わり四人でゆるりと校門をめざしてゆつたりと歩いてみると……

「おや？おやおや？そこにおわすは噂の編入生君では？」

何やら活発そうな女子生徒を先頭に、朝話した白狐？猫？の子とクラスをまとめていた狼の子、そしていやに嬉しそうなあやめのグループと出くわす。

「お？そちらも今からお帰りで？」

「そうだよ！今日はゲーマーズの集まりもないからフブキ達と帰るんだ！」

「黒ちゃんも先に帰っちゃったけどね」

あ、この白い子、誰かに似てるなって常々思つてたけど……そうだ、クロと瓜二つなんだ。………つて我ながら今更かよ、俺。

「そ、それなら一緒に帰らないか？」

「ん？いちおうこの後、俺らは寄り道するが、それでもいいのなら俺は特に問題はねえよ」

「行先は金剛の話からして、いつものお店だよ」

「それなら私は大歓迎!」「ウチも問題は無いかな」

「よっしゃ!そうと決まれば早速向かおうぜ!」

こういう時の金剛の率先力は助かるが……何やらいつも以上に気合が入ってるな。具体的には先の活発そうな女子生徒が声をかけてきて、俺達が相手さん方のメンツを確認した時ぐらいから。

「……何か金剛の気合いの入り用が強くなってないか?」

「あゝ、ゲームーズの二人がいるからだね」

「ゲームーズ?さっきもそんな単語が出てたけど一体?」

「正式名称は『ホロライブゲームーズ』。あの白髪の狐の子、白上フブキちゃんをリーダーにしたゲーム好きが集まった学園のサークルのひとつでね、ファンもすんごい多いんだ」

「ほお〜?」

「おや?呼びました?」

零斗とそんな話をしていると、件の少女……朝SHR前に話した白上フブキとその部活仲間でもあるという狼の子がこちらへとやってきた。因みに彼女らのファンであるという金剛は、最初に話しかけてきた子、麗鵝、そしてあやめと共に何やら楽しそうに話している。

「ん、いや何、少し零斗からお前らの事を色々聞いてたんだよ」

「ウチらのこと？……あ、そういえば自己紹介まだだったね、ウチは大神ミオ。同じクラスだし、仲良くしてくれると嬉しいな、鴻山くん」

「そして、私が……」「白『猫』の白上フブキだろ？朝は世話んなったな」

「うぐ……ち、違うよ！私は狐じゃい!!」

「はてさて、真実はいかがなもんだか」

「むうう……いつか絶対私が狐であるってその身に分らせちやる……！」

つと……流石にいきなり弄りすぎたか。何だか、白上が嫌に怖い目付きになって変に燃えてやがるぞ？……おお、怖い怖い。

「あはは……何だかフブキの弄り方が既にわかっちゃつてるね……」

「朝の周りや白上自身の反応から察したのさ」

「シンは昔つかからそういうのに鋭いんだよね」

「何となくだけどな。ともかく大神だったな、改めて鴻山龍神だ。これからよろしく頼む」

「こちらこそよろしくね」

「がるるう……」

「………今度は狼になっちゃったか」

大神の背後に隠れつつ、その白いしっぽを奮い立たせた白上がこちらに向かつて威嚇のようなものをしてくる………が、迫力は無いに等しい、というか、逆に愛くるしい小動物のような雰囲気があるな。

「どうどう落ち着け落ち着け」

「ぐるるう………」

うん、怖さ零可愛さ百とはこの事だな。

「てか、ひとつ聞きたいんだが……白上とクロって性格とかは全然違うけど、容姿については瓜二つだよな。なんでなんだ？」

「う？黒ちゃん？」

「黒ちゃんとフブキは一卵双生児なんよ。それで綺麗に白黒で別れてたから、苗字だけ変えてるんだ」

獣状態だった白上の代わりに大神が答えてくれる。この子、クラスでもまとめ役だったが、普段からオカン気質なんかな。………何か近いモノを感じなくもないのは気のせいだろうか。

「なるほどなあ、それだったらあれだけ似てるのも頷ける。性格は全然違うけど」

「余談だけど、フブキよりも黒ちゃんの方が色々しつかりしてるよ。朝はちゃんと起きるし、料理とかもしつかりできる………確かによくサボるけどね」



「言われてみると確かにサボりはするけど成績とかも黒さんの方が上だしね〜」

「つまりはアイツの方が姉ってことか」

「……なんか、鴻山くんの中で私の立ち位置が変な方向に向かってるような気がしてきた」

「そんなことないぞ?」

「……………朝遅刻してきたくせして、ゲームに夢中になってSHRほっぼる奴くらいな認識だけだな。……………そんなこと言うとう学園初日の授業をほぼ全てサボってたやつはなんにも言えないんだけど。」



それから、もう1人の女子生徒……夏色まつりとの自己紹介を済ませつつ、賑やかに金剛のオススメの店とやらに向かっていたのだが……………途中からやけに見覚えのある道になってきたのが気になる。

「ん〜…………」

「どうしたの?」

「いや……………気のせいかな何やら見覚えのある道なんだよなあ…………」

「あれ？そもそもシンってこの町出身なのか？」

「一応、な。色々あつて全国を転々とはしていたが……産まれたのはこの町だ」

「ほほう、まさか同郷の者とはな」

「それについては俺や零斗が保証するぜ。ちいせえ頃はずっと一緒だったからな！」

「ずっとじゃねえだろ……」

「おお、これが男の友情……」

「まつりちゃん？なんか凄い顔になつてるよ？」

んん………にしてもホントにこの道見覚えが………あ。

「ははくん？なるほどね」

「ん？」

「いや、何でもねえよ」

金剛のオススメの店、俺分かつちまつたや。………しかしまあ、せつかくサプライズを考えてくれたんだ、それを無下になんてしねえし出来るわけがねえ。

「お！見えてきたぞ！あの店だア!!」

そうして、俺が行先に検討がついてるのを知らず、気前よく金剛は………少し先にあつた、古いかにも様々なものが出てきそうな見た目の家屋の前に置いてある看板を指さす。そこにはおどろおどろしい文字で「和風喫茶店 “大墳墓”」と記されていて

「……………ああ、やっぱりここか。」

「つうわけで到着したぜ！ここがオススメの……」「和ホラー風緑茶&トウモロコシ料理がメインメニューの喫茶店『大墳墓』」

「……え？」

「しっ、知ってたのか!？」

「あれ？でも、ここができたのはシンがこの町を出たあとだよ？」

「……………俺がこの店を知ってる理由は入りやあわかる」

「いやはや、まさかこの店をチョイスするとは……しかも話的に結構な頻度で訪れてたみたいだな、鉢合わせなくて良かった。」

「そんなことを思いつつ、真っ先にこれまたおどろおどろしい装飾がされた喫茶店のドアを開く。すると……」

「いらっしや……あら、龍神くんじゃない。今日シフト入ってたかしら？」

「扉と同じような装飾が施された喫茶店内装にはあまりマッチこそはしてはいないものの、自他共に認める整った容姿とそれに見合った白い髪と澄んだ水色の瞳を持つ女性にして、俺のここでの先輩……水鏡みかがみ涼りょうが迎えしてくれる。」

「……………そして、さっきの彼女の言葉でわかる人もいるだろうが………この店、和ホラー風喫茶店『大墳墓』は俺のバイト先のひとつなのである。」

「いや、今日は後ろでポカンとしてる友人たちと一緒にお客さんとして来ました」  
「そうなのね。ええと……結構大人数？」

「俺を含めて総勢8名です。席、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ♪マスター!! 8名様ご案内します〜!!」

水鏡さんが厨房の奥に声をかけると微妙に「は〜い♪」と返事が聞こえ、その返事を聞いてから水鏡さんは僕達を広い大テーブルがあるスペースへと案内してくれた。

「それじゃ、注文が決まったら呼んでね♪」

笑顔と共に一言残してから、別テーブルのお客さんの元へと向かう水鏡さんを見送った後、まだ驚きが抜けていない面々へと向き直る。

「……………驚きすぎだろ、お前さんら」

「い、いやいや、まさかここでバイトしてるなんて…………」

「二度この町に来た時いい塩梅のバイト代とシフトをを考えてくれた店がここだったからな。しかも、掛け持ちOKってのと掛け持ち先を紹介してくれるいい所だぞ」

「にしたって…………あまり近づかんだろ？」

まあ……………なんであんな見た目にしたのか、初見さんにとつちや入りにくい店であることは確かだな。常連さん達が多いから十二分に経営できてんだけども。

「ま……………元々マスターさんと親父繋がりで知り合いだったつてのもあるんだがな」

「え？」

「はい、そうなのですよ。そして、皆様、いらつしやいませ♪」

そんな話をしていると、ひよっこりとこの店のマスターである龍族特有の角とつぽを生やした渋めながらも暖かな頬笑みを浮かべた男性……ナザリックⅡOBⅡロードさんが姿を現し、皆それぞれの挨拶を返す。

「うわ……幼馴染みの俺も知らなかつたツスよ、まさかマスターとシンが知り合いだなんて」

「龍神様のお父様には色々お世話になりました……その縁から龍神様とも親交を深めていたのですよ」

「ほえ〜それで……」

「今回の引越しとかも手伝って貰った上にこんないい条件でバイトさせてくれるナザさんにはホントに感謝感謝だよ」

「いえいえ、お気になさらないください♪それと、これはサービスのお茶です、暑いのでお気をつけてどうぞ♪」

「おおっ！ありがとうございます♪」

お茶と聞いて真っ先に食らいついた白上が早速一口含み、ふう……と感嘆の声を上げつつ耳とつぽをふやけさせる。

そして、お茶を分け終えるとナザさんはにこやかな頬笑みを浮かべたまま一礼して再び厨房の方へ戻って言った。

「相変わらずフブキはマスターの淹れるお茶が好きだよね〜」

「だってとつても美味しいんだもん〜……」

「つてか、すげえふにやふにやだな」

「フブキはここのお茶を飲むといつもこうなっちゃうんだ」

「「ああ〜……」」

「そして、それに感化されて金剛と夏色もとろける」

「でも、金剛達程じゃないけれどもフブキちゃんのほっこりしてるところを見ると癒されるよね〜」

「わかるう〜」

「ま、ナザさんの淹れるお茶は確かにうめえつてもあるからな」

「それも、わかるう〜」

「あれ、でも、なんで鴻山くんだけ器が違うの？」

「俺だけアイスだからだよ……猫舌なもんでね」

「猫舌……かわいい……」

「……なんで百鬼までふにやけてるんだ？」

「さあ?なんでだろうね」

そうこうしつつそれぞれの食べる料理を決めて水鏡さんを呼び、注文。そして、続々と運ばれてくる品物を皆でつつきつつ俺の話題を中心に盛り上がっていった。



そして、宴会のような賑わいとなりつつあった最中……

「龍神くん、ちよつといいかな」

少し申し訳なさそうに水鏡さんが顔を覗かせた。

………ふむ、何かあったのかな?

「どうしました?」

「えつとね、今日シフトに入る予定だった子が急用で来れなくなっちゃって……」

「分かりました、その穴埋めですね」

「ええ。お友達と盛り上がっているとどころ申し訳ないのだけど……」

「つてことなんだが……わりい、ちよつと抜けても大丈夫か?」

「おや。それは仕方な「もしかして、シンのウェイター姿が見れるのか!」えと……あやめ嬢?」

いや、なしてあやめはそんなに目を煌めかせてるんだ？

「でも、百鬼ほどではないが、君の働きぶりも気になるな」

「……………まあ、今日はいきなりエスケーブしてたからね……………」

「エスケーブ……………黒ちゃん……………せんせ……………うっ、頭が……………」

「……………まゝ、別に減るもんじゃねえし良いけどもさ」

とりあえず、了承してくれたつてとこでもう一度皆に断りを入れてから席を立ち、水鏡さんの後続く。

「ごめんね、いきなり呼んじやって」

「別に構いませんよ。世話になってる分、その恩返しはしないとイケませんからね」

「学校の授業はサボったの？」

「なんで、ここでその話になるんですか……………」

ジト目になった水鏡さんから軽く睨まれつつ、更衣室に入って自分のロッカーを開けて学校の制服から、手早くこの店のウェイターの格好に着替え、髪型も少し形を変える。そして、更衣室を後にし事務所によってタイムカードを差し込んでから厨房に立寄る。

「マスター！鴻山、入ります！」

「ああ！申し訳ないです！」

「気にしないでください！接客いきますね！」



忙しそうなナザさんに一声かけてから、丁度呼び出しが入ったテーブルへと向かう

……

—————

「お待ちせしました、ご注文を……」

「あら……」

「あ、噂の編入生くんだ〜♪」

「……なるほど、ここでバイトしているのか」

「お腹すいたにえ〜……」

「ねえねえ、せっかくだし話そうよ♪」

「おや、同じ学園の人……確かこのスカーフなら先輩に当たるのか。って、そのうちの一人の俺の顔を見てから楽しそうに話しかけてきてるのってパンフレットでみた高等部生徒会長のときのそらさんじゃ……？ いや、今は確認することはよそう。こっちだつて忙しいし……」

「申し訳ありません、現在少々混み合っております……」

「ありやりや、残念……」

「仕方ないわよ、バイトの邪魔は出来ないもの……ごめんなさい、これとコレを注文するわ」

「承りました。他にご注文は……」

「……このスイーツを1人前頼む。後、俺には緑茶を1杯」

「にえ……」

「……あとは特にないわね」

「分かりました。すぐにお持ちしますので少々お待ちください」

一礼してからそこを後にし、すぐ様受け取った注文を伝える。そして、またすぐに別のテーブルへ……

—————

「お待たせしまし……」

「え!?!先輩!?!」

「わ!びつくりs」「あ、鴻山くんだ」

「へえ……この子が噂の……」

つとお?またか!しかも、4分の3は知ってる人達だし!

「申し訳ありません、現在混み合っておりまして……」

「くっ!」（パシャシャシャシャシャシャツ）

おい、天音よ。なしてお前は写真を撮つとるのだ、しかも高速連写で。

「ねえねえ、また今度さ時間があつたらさ、またテトリス勝負しようよ!」

星街よ、そのお誘いは嬉しいが今はそれどころじゃないんだ察してくれ。

「えと……それじゃあコレとコレを、あとデザー（パシャシャシャシャシャシャ）……にコレを」

ナイスだ、角巻! 被つてたけどな! あとお前は一体、何枚撮るんだよ天音! さつきからずつと撮つてるじゃねえか!!

「フムフム……?」

「その……すみません。ご注文を……」

そつして、さつきからあなたは何を吟味してるんですか! 金髪の先輩!

「あ、ごめんね。私はいいから……」

結局無いんかい!!

突つ込みたい気持ちは山々だが、ここは我慢する。ともかく一礼して……（パシャシャシャシャシャ）まだ撮つとるのか天音え!!……コホン、そうして再び厨房へと注文を伝え、次なるテーブルへ……

「お待たせしました。ご注文……」

「牛丼大盛り五杯!」「いや、ノエル?ここ喫茶店だよ!?!」

ナイス突っ込みだエルフの人!こういう喫茶店に牛丼なんてそうそうないぞ!!あるところにはあるけども!!つうか、牛丼大盛り五杯ってどんだけ食うねん!!

「えっと……すいません。コレをふたつ、そのうちひとつを大盛りでお願いします」  
「るしあはコレ!」

きつとこの集団の中で一番まともであろう少し褐色肌のエルフの注文に続いて、小柄な緑髪の子が元気よく注文する。……しかし、何だ。なんで緑髪の子はなんか海賊の格好した人の膝の上にいるんだ?……というか、海賊の人に限らずこのテーブルの人達皆何かしらコスプレみたいなのしてるな。さつき牛丼頼んだやつは何処ぞの騎士団みたいな格好だし、まともなエルフもチャイナ服みたいなの着てるしというかそれよりも彼女に近くに浮いている小さなパンダは一体なんなんだ。んで、緑髪の子は……まあこの子の服装が一番まともか。……で、あとは兎と。

「他にご注文はありますか?」

「マリンとペこらは？」

「ん〜……私は緑茶を貰います」

「ペこらは……」「緑茶と人参一つですね、承りました」「ちよつと待つペこ!？」

何だよ、こっちは忙しいんだよ、人参嫌いなのか兎よ。

「ペこらもスイーツ食べたいの!!」

「……分かりました」

「いやホントに分かってるう!？」

とりあえず『人参（スイーツ）』とでも書いてくか。

まだ喚いているペこらと呼ばれた兎は置いておいて、一礼してからテーブルを後にして、厨房へと注文を伝える……

「?人参のスイーツ……?」

「兎のお客さんだったので。まあ、人参に生クリーム付けてあげればいいと思いますよ」  
「ん〜……それなら簡単に出来るのでいいのですけど……」

不思議そうに首を傾げるナザさんだったが、すぐさま料理を作り始めた。それを見届けてからまたまた呼び出しの入ったテーブルへ……

—————

「お待たせしました、ご注文をどうぞ」

「ご注文はアナタで♪」

「帰れ」

「酷くないデスカ!?!」

何だよ何だよ、この店。弥吾呉学園の奴らにはめちやくちや人気なのか？今度はココとトワ、白氷那くん……そして見知らぬ、しかし同じ学園の制服を着た同級生二名か。

「ココ、悪いが今忙しくてな。早めに注文頼む」

「む……」

「忙しいなら我慢しよう……えと、このパフェを5つお願いします」

「あいよ」

そうして、注文を読み上げていると……

「えと……私もここでバイトしてるんだけど……スウ……手伝った方がいいかな？」

同級生二人のうちの片方、濃い紫色の髪を流した女子の方がおずおずと声をかけてきた。

……ふむ。

「ちよつと待つてな……水鏡さん!!」

「どしたの〜?」

「人手、まだいります?」

「ん〜……………正直言うとかしいわね」

「分かりました。……………つうわけで、悪いな手伝ってもらえるか?えと……………」

「あ、あていし、湊あくあ。えと……………確か……………」

「今日隣のクラスに編入してきた人だよね!」

「ん、その通り。詳しいことはココにでも聞いとけ……………そんじゃ、湊悪いが手伝い頼む

!」

「わ、分かった!」

湊を連れてテーブルを後にし、厨房へ注文を伝える……………そして、そのまま次の  
テーブル……………



……………ようやくピーク終わった……………。

控え室のソファにぐったりと寄りかかりつつ、マスターの淹れてくれたお茶を飲んで  
一息つく。流石にあの勝負の後だと疲れも増えるな……………。

「二人とも、今日はありがとう。すっごい助かったわ」

「はは……まさかここまで大変なことになるーとは……」

「い、いえいえ！お気になさらず……」

「いつもはここまでじゃないのだけでも……まあ、いい経験にはなったわよね」

「確かに……つと」

さて……あんまりここでゆったりしてる訳にもいかねえな、皆を待たしちまつてる。

「つと……これから俺一緒に来てるやつらのところに戻るけど……湊はどうする？」  
「コ  
ら帰っちまつたら？」

「あ………えと………」

「因みにメンツは男性陣は俺、こ……鳳、戦場ヶ原、未来川。女性陣は白上、大神、夏色  
にあやめだ」

「スウー………そ、それなら……邪魔させてもらおうかな………」

「ん、わかった。……つか、そんなに緊張しなくていいぜ？」

俺の言葉にもガチガチに固まりながら高速で首を振るう湊……ううむ、どうにもすん  
げえコミュ障か何かっぽいな。

「………あゝ、ともかく行くこうか？」

「ひ。ひゃい!!」



んで……湊共に皆が待つてるテーブルへと戻ったんだが……………

「……………なんか増えてるな」

「む。なんかつてなんなのさ〜？」

「ひゃあ〜……！」「ね！ね！凄いでしょう!!」「これは……………ヤバイ余!!」

「やほ〜♪お邪魔してるね♪」

「いや〜、今日の勝負について色々聞けて楽しかった!」

「あ、あくあちゃんもここでバイトしてたんだね。ともかく、二人ともお疲れ様」

「あ、ありがとうミオちゃん……………!」

「……………つか、なんでしれっとお前までいるんだよ……………」

「え!? 2人つて知り合いなの!?!」

「あれ? 話してなかったか? 俺ら3人幼馴染みなんよ」

「何だつてえ!?!」

「それは僕も初めて知ったよ……………」

「中々、面白い組み合わせじゃないか」

何やら人が増えてるのに加え、もう一人の幼馴染みにして俺が引越すよりも先に外国に留学して以来の再会である、カナデレミがいつの間にかやら鎮座していた………うちの学園の制服で。

「久しぶりの幼馴染みに対しての第一声が『なんか増えてる』ってなんなの？」

「まさか、レミが来てる……しかも、同じ学園にいたなんて思うかよ……」

「それについては私もまさかリョウくんが編入して来るなんておもってなかったよ。すいせいちゃんとのテトリス勝負に呼ばれてびっくりしちゃった」

「めっちゃくちや疲れたがな……。んで！星街、さつき言ってたテトリス勝負予定あったらやろうぜ。苦手なジャンルのゲームとはいえ、負けっぱなしってのは嫌だからな！」

「うんうん！こちらこそ大歓迎だよ！でも……私も負けないからね♪」

「望むところさ……！」

「すいちゃんに宣戦布告してる……」

「でも、二人の勝負なら見てみたいな」

「相変わらず負けず嫌いなんだから……」

「はは！それがコイツの面白いところなんじゃねえか」

「奴の実力ならば、すいちゃんも楽しめるだろうから……会員達には手出ししないように厳命しておこう」

「あはは……麗鵝も大変だね……」

（も、もしかしてライバル？）

（い、いや！まだ分かりませんよあやめ先輩！）

「あ……もしかして、彼って……」

「そうそう、クラスに戻った時にも話したすいせいと凄い勝負を繰り広げた名プレイヤーだよ」

そうして、俺と星街が火花を散らしていると……

「やほ……って、何か龍神くんが燃えてるね」

「あ……水鏡さん」

「お、何かありましたか？」

「そうそう構えなくていいよ。後お客さんで残ってるのこの人達だけだし、私も手隙になってマスターの許可を得てから混ざりに来たのと、龍神くんいつもの頼みに来ただけだから♪」

ひよっこりと首だけを出してきた水鏡さんの言葉に皆が首を傾げる中で俺は一人、やれやれまたかかと思いつつ肩を竦める。

………しかしまあ、今日は忙しかつたししやあねえか。

「……、また寝ちやったんですか？」（へ？こころちゃん？）

「ええ、そりやもうぐつすりと。こんな時だけでもまたお願いしてもいいかな（ふえ？）  
「……今日は特に忙しかったら特別に」

俺の言葉に少し苦笑いしつつ、水鏡さんが俺達が居るスペースに入ってくると……その背中にはやはりりというかなんというか……予想通り、すやすやと静かな寝息を立てる天宮こころの姿があつた。そして、少し断りを入れつつ湊と席を代わってもらい、こころを水鏡さんの背中から受け取って膝の上に乗つけると、すぐさま猫のように体を縮こませながら俺の服をギユツと掴む………のを見ていた皆のうちの、恐らく約2名が何やらおかしいな奇声をあげる。

「zzzzzz……んみや……」

「つたく……」

「（（（おお……何か母性感じる顔だ……））））」

「お前……またか」

「またかつてなんだよ」

「仕方ないよ、剛くん。リョウくん、口は悪いけど雰囲気優しいのは確かだから」

「にしたって………なあゝ流石にこうまで異性から頼られるのはすんげえ羨ましいぞ？」

「俺は頼って貰えるだけで十分だがな」

そう話しつつ、すやすやと先程よりも心地よさそうな表情で寝息を立てるころの頭をゆったり撫でてやる。

「ちよちよちよ!？」「ふっふふ二人はどどどんなかんかん!!」

「ハイハイ、落ち着け落ち着け二人共。こころとはこのバイトで出会った……………いわゆる妹みたいいなもんさ」

「妹分なんだ。というか、このバイトそこそこ長いの?」

「実は何気にここに定住する前、半年前くらいからやってた。ま、裏方メインで、接客は平日の昼間のみだったから顔合わせることはなかったらうよ」

「そして、その子と出会ったのか」

「そ、俺がバイト始めて少しして入ってきてな、色々教えてやってるウチに懐かれた。因みに、湊と今日が初見だったのは少し立て込んでバイトに來れない時期があつてな……………多分そんな時に湊がバイトに入ってきたからだな」

「……………なるほど、だからこころちゃんが少し落ち込み気味だつて水鏡さんが話してたんだ……………もしかして、ここ最近元気になったのつて……………」

「俺がバイトに復帰したからだろうな……………つと」

「うみゆ……………」

「わり、もう少し小声で話していいか?」

少し声が大きすぎたのか、元々小さな体を更に縮こませてうるさそうに身を振るころ。さて、どうしたもんか……と考えを巡らせながら彼女の頭をあやすように撫でていると、頭上からは何やらパシャパシャと連続して写真を撮る音が。

「……………お前ら？」

「あ、いやあ……………」

「零斗らもかよ……………」

まさか、女性陣だけではなく男性陣まで写真を撮ってやがるとは……………。つてか、あやめと天音の目が少し怖いんだが？

「た、たはは……………私と熱戦を繰り広げた人と同じ人とは思えなくて……………」

「……………き、聞いてたような人とはかけ離れすぎててつい……………」

「いや……………昔からリヨウくんは母性ある方だと思ってたけど、まさか成長して更にそれが増してるとはね〜」

「確かに、俺もコイツがここまでオカン属性増やしてるとは思わなんだわ」

「おや？それはちよつと気になる話だね♪」

「その話！」「詳しく！」「教えて!!」「欲しい余!!」

「何だかあやめちゃんとかなたちゃんのお息が一日で凄い合うようになって……………」

「そこは気にしなくても大丈夫だよ、フブキちゃん〜」

「でも、天宮ちゃんだっけ？確かに何だか保護欲がかきたてられる子だね」

「それについては同意する」

「何やらうちのクラスのオカンの数が増えたようね」

「片方男だろうが……」

「……………優しいんだ……………」

「あれ？あくあ？」

「!!べつべべ別になんでもないによ!!」

結局、賑やかになる俺達の席。

……………けど、これからこんな日々が続くとになると嬉しいもんがあるな。



その後、しばらく皆でワイワイと賑やかに過ごしていたが麗鵝の塾や星街のレッスンの時間が近づいてきたということもあってお開きとなり、それぞれの帰路に着くことになった。(因みに代金は男性陣で割り勘した。女子に払わすわけにやいかんからな)んで、俺はと言うと…………

「zzzzzzzz……………」

「つしよつと……」

「えつえと……だ、大丈夫ですか？」

「ああ、つか……天音がこつちの方とはな」

結局最後まで眠りこけていたところを背負い、彼女の自宅へ……同じ方向に自宅があり、しかも同じクラスである（これには結構驚いた）天音と共に向かっていった。

「にしても……何か今日はやけにお前に世話になったな」

「ふえ!？」

「最初、案内してくれたのもお前だったし、星街とのあの勝負が成り立ったのもお前が用意してくれたおかげだった。ありがとうな」

「へっ……へいつ!!」

それと同じくらい奇行が目立ったけどな……それは言わないでおくか。何か嬉しそうなところに水を刺したくねえしな。

それからは天音の普段の生活の様子を聞きつつ、のんびりと歩を進める。………因みに天音の話としては総じて、あの暴走ドラゴンゴゴに苦勞してるみたいだ。………全くアイツは

……。

「ん……」

そうして少しすると、背中にいたところが目を覚ましたようで身を起こした気配がす



る。

「お、起きたか」

「んみゆ……………ふあれ？にいと……………かなちゃん？」

「おはよ、こころちゃん」

「……………んん……………」

「今日は爆睡だったな、結構疲れてたか？」

「……………そうみたい……………」

「そか。ならそのまま休んでろ、家まで送ってやるから」

「ん……………ありがと、にいに……………」

だが、疲れで睡魔が強いのか再び俺の背に身を預けて寝息を立て始めた。

「ありや……………また寝ちゃいましたね……………（う、羨ましい〜）」

「それだけ疲れてたんだろ」

少しこころを背負い直してから、何となく星が瞬き始めた空を見上げる。

……………明日からは本格的に今日以上にあの学園を、中心とした生活がスタートする。

別に前の学校も楽しくなかった訳じゃないが……………今日あつた面子だけでも濃い

連中なんだ、これからの日々が楽しくなりそうだけ……あん時の辛さを忘れさせてくれそうな程に……な。

「鴻山先輩？」

「……わり、少しぼんやりしてたわ」

「もしかして……先輩も疲れてます？」

「かもしれねえな。あの激闘の後だ……流石にあるかもしれねえや。……あと、『鴻

山』じゃなくて名前呼びとかあだ名呼びでもいいぞ」

「ふえ!? そっそそそそそんなおとおお恐れ多い……」

「おいおい、お前の中で俺は一体何なってんだっての。ま、強制じゃねえし、こっちは名前前で呼ばせてもらうがそっちの好きなタイミングでいいぞ」

「はっはははいっ! ってはい?」

「ってか、今日会った奴らは皆名前呼びしてもいいか?……後で確認するとすつか。ともかく本格的に暗くなる前に行くぞ、かなた」

「わっ! ま、待つてくださいいよ!!」

「こころを起こさないようにしつつ軽く早足で歩き始めた俺の後を慌てて追いかけてくるかなた……」

L E T S  
G O T O  
N E X T  
S T A G E  
a c t | 3  
e n d

………  
ホント、明日からこんな日常が続けばいいな。

# 高等部生徒会とファンタジークラブとかつての相棒 a

t 4 / 1 6 (木) a c t — 1

朝。

そう、朝だ。

小鳥がさえずり、木々の隙間から暖かな陽射しが降り注ぐ朝……

俺はぐったりと己のゲーミングチェアに体を預けて [4 / 1 6 6 : 4 5] を表示しているモニターの時計を薄ぼんやりと眺めていた。

「……………これは……………プレミしたな……………」

『……………だねえ……………』

『いやいや、そう言っても君らはどうせ授業寝てるんでしょ?』

「そうとも言う」

『カツコつけて言うことじゃないよ……………』

『俺は今から寝るがな!』

「羨ましいぜ……………吸血鬼……………」

『ほんつつと羨ましいよねえ……………』

『ハイハイ。それよりも、そろそろ解散して学校へ行く支度しましょ?』

『わ!赤羽さんに指揮られた!』

『何よ!文句ある!!』

「そりやどつちかつて言えばヨウは指揮する方じゃなくて、突撃するようなタイプだからだろ」

『さっすがシン!よくわかってるう!』

『……とりあえず、後で龍神くんと葛葉は叩きのめすとして私はもう行くね』

『え!?!叶は!?!』

『僕は何も言っていないから♪』

「……………後が怖えな……………ともかく俺も1度落ちるわ。またな」

『またね♪』『いつてら!』と残った2人の声を聞いてから、discordの接続を切つてからヘッドホンを外して机に置き、チェアに寄りかかりつつ大きく伸びをした……………。

昨日、こころとかなたを家まで送つて帰ると宴会の時に教えた連絡先にすいせいから『レッスン終わりにちよつと対戦しよ!』とお誘いを受け、大体夜の10時からすいせいが眠るまでの小一時間程、テトリス対決をし続けたんだが……………(対戦数こそ覚えてないが、6:4ぐらいの割合で負け越した。アイツ強すぎだろ……………逆にそれが燃えるんけどな!)その後、なんとというか……………まだまだ戦い足りないというか、変な闘争心の燻りが

残っててまだ寝れずにいたところに、ゲーム仲間から『人数足りなくなっちゃったんだけど……今からでも大丈夫？』との連絡を受け、『もちろんOKさ！』と意気揚々と戦場へと赴き、ソイツとその相方の二人を加えた4人で駆け抜け……現在に至る。

……物の見事に貫徹である、されど後悔はない。

「……………一度、顔洗いますか」

そう呟きつつ立ち上がり自室から出て一階に降りようと階段まで行くと、丁度二階へと登って来る以前、俺が誕生日プレゼントとして送って以降お気に入りとしてくれた淡いロングスカートと桜柄のシャツを着込んでエプロンをつけた赤髪で長身の女性……俺の従姉弟である緋乃ひの あかね姉ちゃんと鉢合わせた。

「おはよ、あか姉ちゃん」

「あ、おは……つて、隈が凄かことになつとー!!また遅うまでゲームしとつたと?」

「ん……………まあ、ちよつと」

「もう……………そげんことばかりしてちや体調崩してしまうよ?」

「んぐ……………」

「うちもゲーム好いとーけんやりたかって気持ちはよう分かるばつてん、何事も程々に。そげん事で体調崩して欲しゆうなかけん……」

「あか姉ちゃん……………」

参ったな……………昔っからあか姉ちゃんの困り顔には弱いんだから、そうされちゃうと…なあ……………つてか、早速後悔してるし……………後、言つとくが別にシスコンじゃねえぞ？誰に弁明する訳じゃないが。

「……………気をつけるよ……………。えと、それであか姉ちゃんはどうしたんだ？」

「ん！それでうちは朝ご飯できたけん、まだ寝こけとー3人と君んごと寝らんで起きたつたであろうららば連れ来ようとも思いんしゃい」

「なるほろ、手伝おうか？」

「そやなあ……………うん、お願いしようかな。ハンリちゃんの方お願いしたつちやよか？」

俺の問いかけに少し思案したあか姉ちゃんだったが、すぐに俺の好意に甘えてくれる。……………ま、はー姉と話した方が俺の目も醒めてるだろうからつてもものあんだろーけど。

余談だが、あか姉ちゃんの実家は元々博多の方の出身で今現在のように親しい人やoffの時とかはこうして、可愛い方言ランキング

圧倒的トップである博多弁で話してくれる。実際に聞くとめちやくちや可愛いぞ、博多弁。

「分かった、はー姉ね」

「任しえたばい」

「はいよ……………して、ここ最近はこの部のやつを見たの？」

「2部！」

「2部ってことは、確か…………【戦闘潮流】だったか？『ぶつ壊れるほど、シュウトオ!!』の」

あか姉ちゃんと共に件の4人の部屋に向かう間に、それとなく彼女が大好きなアニメ化もしている漫画、『ジヨジヨ』の何部を見たのか聞く。……………何故かって言うのは、このあと、すぐに、分かる。

「そうそうそれぞれ！つとと……………そんな話は一度我慢して……………ハンリちゃんの方、よろしゅうね」

「はいよ〜」

そうして、まずあか姉ちゃんが寝坊組の内の一人の部屋に入ったのを確認し……………はー姉の部屋にすぐに向かわずにその部屋のドア付近に一度立ち止まり、耳を済ます。すると……………

「朝ごはんできたばい！早う起きてー！ー！！必殺流法<sup>ド</sup>“神砂嵐”いいー！ー！ー！！」

「うにやあああああああー！ー！ー！！?!?!?!」



部屋の中から恐らくはその作品の技名を叫ぶあか姉ちゃんの声と、少し鈍い音ともになっさけない悲鳴がある……いきなりそれいくのか。

さて、先程のあか姉ちゃんへ質問した意図なんだが……さっきの様子を聞いててわかった人もいるだろうけど、つまりはあか姉ちゃんが最近読んだ、見た『ジョジョ』の「部」に登場するキャラによって起こし方も変わってくるのだ。例えば6部の漫画を読んだ翌日には……『やれやれって感じだわ……』とか、『素数』ば数えて落ちつくたい……『素数』は1と自分ん数でしか割ることできん孤独な数字……うちに勇気ばくるー。……うーん、ここはやっぱり原作通りに言わな違和感が……』とか言ったり、4部のアニメを見た後の日に寝坊したりすると、軽く頭を小突かれた後『いったんおめーば起こしえよオッ、これで全然卑怯じゃねーわけばいッ!!』とか言ったりからもう一発拳骨を落として起こしたり等々、あか姉ちゃんの日常によく反映される。……やられる方はちよつと痛い、聞いたり見たりする方は面白いからいいんだよな、これ。

……とまあ、こうしていると出てきたあか姉ちゃんと鉢合わせしてこっちに飛び火しちゃうだし、俺もさっさと姉を呼ぶとしますかね。

そう考えた俺は「ハンリの部屋」と書かれたプレートのある部屋のドアの前に立ち軽くノックをする。

「はー姉、起きてる?」

『あれ、龍? え、まさか、もう朝!?!』

「だあね。あか姉ちゃんか、ご飯できたつてさ」

『ちよ、ちよつとまつてて! 後あかねちゃんには直ぐに着替えて向かうつて伝えといて!! …… あゝ …… また寝わすれたあゝ …… 』

最後のつぶやきはまあ聞かなかったことにして……

「分かった。2部のキャラの技、喰らう前には来なよ」

『うん! えつと …… 』

部屋の中をガサガサやり始めたし、とりあえず大丈夫だな。 …… とするなら、俺

は先に食堂に向かうとするかね。

「あか姉ちゃん! はー姉は着替えてから向かってさ! んで! 俺も先に食堂行つてるよゝー!」

「はーい! ありがとうとねゝ!! …… よわちゃん起きて!」  
リリースオーダーボードライフ  
 波紋肘支疾走ウウー……!!!

「わきやあああああ?!?!」

……… 悪魔に波紋つてヤバいんじゃないだろーか……… まあ、そもそも波紋なんぞ使えるわけがないんだけど………

「コオオオ……………」

「わく!!あかねちゃんダメ!!波紋は悪魔にきくのおおおおお!!?!?」

いや、何してんだあんたらわ……………」

そんな声を背中に受けながら、あくびを噛み殺しつつゆったりと階段を降りて食堂に割りあてられている部屋の中へと足を運ぶと……

「あ、龍くん、おはよ……………つてすごい顔!」

「おはよう、その顔だとまた夜遅くまでゲームしていたみたいだね」

「おは〜よう、すごい限〜」

「3人ともおはよ。あか姉ちゃんにも言われたけど、そんなに酷いか?」

「一度顔を洗ってくることをオススメするんだけど言っておく」

「マジか……………」

「ちよつと待ってて、今タオル暖めて持って来るから!」

「悪い、セナさん……………んで、みずずは服を引っ張るんでない」

「限を触らせて〜?」

「なんでだ……………」

個性豊かな猫三姉妹こと、愛尾姉妹が各々ゆったりとくつろいでいた。そのうち、世話焼きで優しい長女である愛尾セナさんは俺の顔を見るなり慌ててタオルを取りに

行ってしまったが。

「にしても、毎日毎日よく体が持つね」

「んゝまあ、その分昼とかで寝てるからだろうな」

「でも、今日は確か学校だろう？」

「授業は寝てても大丈夫さ」

「……………なるほど、美玲が昨晚荒れた原因である『破天荒な編入生』とは、やはり君のことだったか」

「んしょ……………うし」

「みすず、お前……………何、器用に俺の体昇つてんだ…………。てか、あの先生とちかげさん、知り合いだったのか？」

「晩酌仲間だね、この街にやってきた時に出会った」

「はい！龍くん、どうぞ。…………後、みすずは龍くんの肩から降りなさい！」

「えゝ……………ここ、居心地いいんだもん……………てしてし」

「ありがと、セナさん……………叩くなコラ」

俺の定位置である席に座りながらクールでしつかり者の次女、ちかげさんと話しつつ、小柄で自由奔放なダウナー末っ子、みすずが戯れてくるのをいなしているうちに、セナさんが持つてきてくれた暖かいタオルを受け取り顔に載せる。

……うん、これはいいな……

「……みすず、のけ」

「ぷらーん」

「待てそれはヤバつぐるじ……」

「こらー！やめなさい、みすず！」

「……物足りない」

「ぷはあつ……おお……死ぬかと思った……」

そうして、若干ダウンな甘えん坊に意図せず殺されそうになりつつも、三姉妹とゆったりと話しながら暖かいタオルの心地良さに浸っていると……

「お待たしえ」

「はく……危なかった……あと少し遅れてたら波紋蹴りを喰らう所だった……」

「うう……まだ背中がちよつと痛い……」

「……せつかく絶品マグロを食べてた夢を見てたのに……」

「何その夢！すつごい美味しそ……あたた……急に動くときつき一撃喰らった脇腹が……」

賑やかな声が聞こえ乗せていたタオルを少しどかして除くと、あか姉ちゃんを先頭に  
して、安心したように息を着く酷い隈がせつかくの容姿を台無しにしている、俺以上の

夜更かしの嬢王（俺命名）であるはー姉こと白砂ハンリ姉が続き、その後ろにはさつきあか姉ちゃんの話していた件の『寝坊組』……夢を食らう悪魔………らしいが、元氣澆刺で可憐な笑顔を振りまくことから天使だエンジェルだとしか評されない宵夢みると、ここ最近アイドルの卵として活動を始めたらしいがどつか抜けている所のせいで実生活じゃそうとは思えない桃園ねむ、そして、マグロを愛しマグロからは愛されてない悲しき宿命の……「……む、なんだかりヨウにバカにされた気がする……」……コホン、時折鋭いが基本寝まくってる猫人、鮪夢るむねの三人が続いて入ってきた。

「あれ、龍は何やってるの？」

「セナさん曰く、顔面酷すぎるらしいからこれで回復してんの。はー姉も多分やった方がいいぜ、ついでに気持ちいいし」

「お、それならご飯食べた後にやろつと」

「………だな、一旦飯だ」

「セナちゃん、用意は？」

「あとは皆のご飯とお味噌汁をよそうだけだよ」

「それなら、早速よそってしまおつか。みる、手伝うて〜」

「は〜い……あてて……」

「二人とも大丈夫〜？」

「だいじよばない……」

「結構いいの貰った……」

「人間、それを自業自得という」

「ちかげちゃん、冷たいよう……」 「ドゥンマ〜イ」

「そだ！ 今日、パンな気分な人〜？」

「俺〜」「あ、私も〜」

あか姉ちゃんの声にタオルをとった俺とはー姉が手を挙げて反応を返したあと、少ししてそれぞれの茶碗によそわれた白飯と味噌汁、パンを頼んだ俺達の分のクロワッサンとコーヒーをトレーに乗せたあか姉ちゃんとセナさんがキッチンから出てきて、それらを各々で受け取ると定位置の席につく。そして……

「それじゃ、」「」「」「いただきますー！」「」「」「」

九人の合唱を皮切りにして、賑やかな朝食を始めるのだった。



さて、これがこつちに戻ってきてからの俺の朝の日常にして、俺ん家の朝の風景だ。んで、なんで俺の他にも、それも女性ばかりいて、こんな大人数が住める家にいる買っ

てことなんだが……………

ここは元々俺の父方のばあちゃん家だったんだが、ばあちゃんが亡くなった時に残した遺志で女性専用のシェアハウスとして使われるようになったんだ。んで、それを管理していたのがあか姉ちゃんの親父さんにして、俺の叔父にあたる人だったんだけど……職場でうっかりミスして事故って大怪我してしまい、ここの管理を誰かにお願ひしなきゃならなくなったんだが……………運悪くなかなか妥当な人がいなかった。あ、別にあか姉ちゃんの母親は離婚してないしちゃんと健在してる。ただ、俺の両親と一緒に世界をまたにかける仕事をしているから出来ないってだけ。そして、しれつと言ったが、俺の両親も同じ理由でNG……………ちゅう時に丁度独り立ちしたいって親に話していた俺に白羽の矢がたったわけだ。……………まあ、まさか女性ばかりの所に放り込まれるとは思ってもなかったが。

けど、半年前くらい前の以前の学校の夏休みとかを利用して、あか姉ちゃんに手助けしてもらいながらシェアハウスの人たちと仲良くなったり、事前にルールを決めたりしたこともあって、すぐに受け入れてもらい、スムーズに事が進んだ結果……………こうして、俺もここに住まわせてもらいつつ、あか姉ちゃんと共にここの大家を、そして、唯一の男手として過ごし、弥吾呉学園に通い始めたってわけさ。

……………よくラノベとか、アニメとか、ゲームとかであるハブニングがなかった訳



じゃアないが………まあ、うん、大丈夫だ。ああ、大丈夫さ………

………  
 ダイジヨウブデシタ、ハイ

因みに、今朝方まで共に貫徹したゲーム仲間にして友人の叶、吸血鬼の葛葉、ヨウこと赤羽葉子は詳しいことは後々話すが、以前通ってた学校でも良くつるんでいた仲のいいグループのひとつ。こうして学校が変わっても気軽に、変わらず接してくれるめちゃくちゃいい奴らだ。



ともあれ、なんだかんだありつつも賑やかな朝食を終えた俺は、一度部屋に戻り手早く学園に行く支度を整える………酷かった限もある程度はマシになったそうな（ちかげさん談）

そして、家から出る前に再度食堂に寄ってあか姉ちゃんが作ってくれた弁当を鞆へとしまいつつ、キッチンで洗い物をしている二人に声をかける。

「あか姉ちゃん、セナさん、俺そろそろ出るわ」

「お？やけに早かね？」

「今日はあそこに寄らんとぐずるやつが出てくるからな……」

「あ、そういえば今日は木曜日だったっけ」

「やったら尚更貫徹しちやつまらんかったばい！」

「……………それは言わんといてや……………」

まさか、あそこまで熱い試合が続くとは思わなんだもん……

「ともかく、行ってくるわ。弁当、サンキューな」

「あ、今日は新規ん入居者しやんがやって来るけん、早めに帰ってきてきんしやい」

「つと……そうだった、そうだった。学校終わったら早めに帰ってくるわ」

「任しえたばい。それじゃ、気ばつけて行ってきんしやい♪」

「行つてらっしやい♪」

「行つてきまゝす」

二人の声を背中に受けつつ、正面玄関から外に出ると昨日と同じ暖かな春の陽気が降り注ぐ。

「今日もいい昼寝日和になるかな？」

「いいねえ〜」

「わ、本当だ」

「ね、ここだったでしょ？おはよう、リョウ君」

「へ？」

今日もまた昨日のやつらと屋上に行けるかなと思案しつつ、石塀を通り抜けて通学路に踏み出した瞬間に背後から声をかけられて思わず素っ頓狂な声を上げつつ振り返ると、どうやら俺の事を待っていたらしいレミと見知らぬ顔の女子生徒がいた。

「お、おつす……レミ。朝早くからどうしたんだ？」

「久しぶりに一緒に登校したくてね」

「……………いいけど……ちよつと寄り道するぞ？」

「ん、大丈夫。ほとんど毎週行ってるって聞いているからそのくらい見越してるよ」

それなら、いいんだが……いや待てなんでお前が俺の行動パターン把握してんの??

……………さしづめ、どこぞの誰かが言ったのか……………。して

「後ろの奴は？学園の医務室の先生並にやたら色気があるが」

「歩きながら紹介するね。まず、この子は私のクラスメイトで親友のサキュバス、ユメノウララ。だから色っぽいんだよ。そして、ウララちゃん、この人が私の幼馴染みの鴻山龍神君だよ」

「は……あなたがレミがよく話してたゲーマー幼馴染み……」

いや、ゲーマー幼馴染みってなんだよレミさんや？

ともかくレミ、ウララ（同級生だから呼び捨てでいいらしい）と軽く自己紹介しつつ並んでゆったりと歩く。

「というか、もうちよこ先生のお世話になったの？」

「昨日、初登校したら遅刻ストレスのぐんセン……郡道センセに引きずり回されたからな……」

「郡道先生またなの……？」

「あの先生日常茶飯事なんかよ……」

「後、ひとつ聞きたいんだけど………鴻山くんって、なんともないの？」

「は？………あくそういうこと」

「………もしかしてホム」 「それは断固として否定させてもらおうか!! 違うんだよ、俺はそう言う各各種族の常に発してる力の影響を受けにくいってゆう特異体質なだけだ」

「こそ、不思議なんだよね」

「ちよこセンセにも不思議がられたしな」

「そんな人もいるのか……世界は広いね」

ま、天使の人らの回復とかも受けにくくなるからキツイ時もあんだけど。 つか金剛はどうしてんだろうな、家は近いのに。

そう話しつつ、表通りから裏通りに入る角を曲がると……

「わ!」「みや!」「おわ!」

「つと!?!……て、かなたとどこころとクロカ。わり、余所見してた」

「わ、大丈夫……?」

「びつつくりした……」

「あまりよそ見すんなよ……。ともかく、おはようさん御三人とも」

「ウツス。………なんか珍しい組み合わせだな」

「はっはっはっ……」「はーい深呼吸しましよ〜ね〜」「ひ、ひっひふそーらんひっひふそーらん」「え、何その呼吸………」

「そこで偶然ばったりな。だが、お前らこっちは学園の方向じゃねえぞ?」

「学園行く前によるとこあつてな。お前らも来るか?」

「時間は大丈夫なの〜?」

「ああ、余裕綽々」

「レミから聞いた話だと大丈夫みたいだよ?」

「……そんならお邪魔させてもらおうかな?」

「あれ?そーいやクロカや、白上は?」

「アイツなら寝坊。毎度のコンだから置いてきた」

わあお、The無慈悲。

ともかく、少し人数が多くなってきたが……まあいいか。……そういや学園も元々女子校だった名残で男が少ないらしいが……この街、男女比率どうなってんだ？ いや、そもそも俺の周りの知り合いも女子が爆速で増えてるし……もう1人くらい男子の知り合いが欲しいとこだな、さすがに肩身が狭えよ……。

\*\*\*\*\*

少し大人数の六人でその後も裏取りを話しながらある程度歩いていき、目的地へとたどり着く……

「え、教会？」

「え？ 目的地、ここ？」

「ほんとにあつたんだ……」

「お前、キリスト教だったのか？」

「ちやうわ。知り合いがここにいの……つか、レミは知ってるだろ」

「え？ 昔遊んでた仲間の子？」

「そうだぞ？ ま、話すより見てもらった方が早いか。んで、こころく起きろく」

「みゃん……」

背中に背負ったところを起こそうとしたが失敗。……さつき出会ってから数分も経たないうちに突然俺の背中に飛び乗ったかと思うと、そのまま寝始めちゃったんだよな……。寝不足の体になや、相当堪えるんだが……。まあ、いいか。

「ほれ、ポカーンとしてないで行くぞ」

少し呆気を取られてる四人をよそに、俺は教会の大きな扉の片方を開き、礼拝堂の中に入り、少し中を見渡し最終目的の者を含めたひとつの集団の元まで静かに歩いてゆく……。それに、なんかここに不釣り合いなカツコの人もいるのが気になるが。

「はよ、朝から熱心……。つと？なんか見知らぬ見た事ある奴が……」

「あ、お兄さん、おはようございます……。にしてもまだですか」

「おはよう」

「おはよく。見知らぬ見たことあるって……。あ、もしかしてバイトで会ったんじゃないのかな？」

「二人はそうだな。もう二人の子は知らないが……。よわ、あまり怒るなって……」  
「いえ、お兄さんがおモテになつてるのはいつもの事なので気にしてません。私たちの方はお祈りを既に済ませましたし、お時間あるのなら後でご紹介しますけど……」

「だつたら拗ねる態度とって欲しくないんだが……。時間は大丈夫だ、それにあつちも丁度いいタイミングみたいだしな」

金剛たちより先に再会した昔からの幼馴染みの妹分、話によれば俺がこの街を出たあとに彼女も一度街を離れたらしい神瀬よわ、そして、彼女の友人で家にも時々遊びに来るおつとりとしたセイレーンの姫様のアイリス・ルセン、無口無表情だが意外と話していると喜怒哀楽が分かりやすいエルフと吸血鬼のハーフ、棺美夜と話している内に件の三人も祈りを終えてこちらへと戻ってくる。

「あ、昨日のウェイターの人……？」

「お、記憶力いいのな」

「ノエルの無茶振りにあそこまで冷静に返してたのと、るしあたちのファンタジークラブに入って欲しいって思えるくらいコスチュームが似合いそうって直感を感じた人だから覚えてたんだ」

「そ、そうか……」

コスプレねえ………興味がなくも無いが。

そんなことを思いつつ、一度長椅子へとところを寝転ばす。

「るうちちゃんの知り合い？」

「ううん、ただ昨日のこの人がバイトしている時に出会ったの」

「はえ………いやはや、すっごいイケメンさん。でもなんで背中にこの子を背負っているの？」



「ども。自己紹介と背負ってた件は後ですつから少し俺の連れと話しててくれ。よわ、俺はシスターに挨拶してくるから」

「分かりました。えと、今お連れの方と言うと丁度お兄さんの後ろに来た方が………女の人ばかり………」

「それについては深く突っ込まんでくれ……ともかくよわの顔見知りもいるし、話はしやすいはずだ」

「私の？」

「ま、頼んだぜ」

そう言うつてよわの頭を軽く撫でてやってから、礼拝堂奥のシスターズルームと銘打つてある部屋のドアまで行き、軽くノックする。すると直ぐに中から『どうぞ』とゆつたりとした声が返つて来て「失礼します」と言いながらゆつくりドアを開ける。そして、目の前の大きな机で書類作業をしているシスターに向かつて一礼をする………

「おはようございます、龍神さん。一週間に一度ではなく、もつと毎日のように来てくださってもいいのですよ？」

「おはようございます。そうはいつでも俺はキリスト教徒じゃないんで」

「もう、そんなことを気にしなくてもいいのですよ？」

「………そんな子供みたいに頬を膨らませないでください、シスタークレア」

目の前の机の書類の山の中、子供のように頬を膨れてすっかりとした物言いでもっと俺と話したいと遠回しに文句言ってるのは、この教会を管理しているシスター、シスタークレア。あか姉ちゃんの友人で俺とも親交があるんだが……なにゆえ俺に固執するんだか……。

「それで本日はどう言った要件で？」

「いえ、龍神さんが弥吾呉学園に編入したのでその制服姿をみて」「友人を待たせているのでそれでは……」「わーわー違います違います!!」

「ハア……全く……」

普段はしっかりしてるのにどうしてこうやって俺とかあか姉ちゃんと話してる時は子供っぽいのか……。この姿をシスターを慕う子供たちに見せてやりたいよ……。そんなことを考えて頭を抱えていると、部屋のドアがノックされてシスターが猫を被つて「どうぞ」と言うと、先程見かけた教会には似合わない奇抜な服装の男子が入ってくる。

「どーも。ここの回線のチェックとセキュリティの更新済ませておきましたよ」

「ありがとうございます、黛さん」

「いえ、俺に出来るのはこれくらいなんで……」

やけにダウンな奴だな？そして、パツと見俺と同じくらいの歳っぽいけど

……あれ？少し待て？青のメツシユが入ってて無気力めな雰囲気で、そんで、白と黒のパーカーでさっきの会話からしてネット系統が得意……もしかして。

「……あんたが黛灰？」

「……確かに俺は黛灰だけど……どうして、俺の事を？」

「『ぶるーず』の相羽ういはの元クラスメイトっつていやあ分かるか？」

「……なるほどね、君がういはが話してた噂のヘンテコ君か」

「ういはのやろう……」

あいつ、なんて話したんだよ……今度会ったらしばいたる。しかしま、ある程度は話しやすそうなやつみたいで良かった。

「改めて、黛灰。以後よろしく」

「鴻山龍神だ、こちらこそよろしく」

「むうう……」

シスターや、そんな『なんで初対面でそんなにフランクなの』みたいな視線をぶっつけんでくれ……

「さて、積もる話もあるが……この後学校だから俺はそろそろ行くぜ」

「俺はもう少しシスターと話してからいくよ」

「おう、今度ゆつくり話そうぜ。それじゃシスター、黛、それじゃまた」

「またね」「はい、お気をつけて」

少し膨れつ面なシスターと黛に一言行ってからシスターの部屋を後にし、女性陣が賑やか話している場所に戻ると……

「お兄さん、お疲れ様です」

「おつかれ。もく、よわちゃん再会してたのなら話して欲しかったな」

「しゃーねえーだろ、そもそも俺とレミが再会したのだから昨日の話だろーが。それによわとだつてほんの少し前にあつたくらいだし……なあ？」

「ええ、お兄さんが帰ってきてるのには驚きました」

「私達もよわちゃんが突然『……お兄さんっ！』って少し泣きながら抱きついた時にはめちゃくちゃびつくりしたけどね」

「恥ずかしいのであまり掘り返さないでください……」

「……」

「んみや……」

「こころ、そろそろ起きてって！こころ！」

「……美夜ちゃん、戸惑ってる……珍しい」

「ほんとに珍しい……」

「……いや、そうなの？私には無表情にしか見えないのだけど……」

「ほほ、半分天使で半分悪魔なのか」

「あはは……ちよつとやらかしちやいまして……………」

「墮天じゃなくて悪魔になるって何したんだ……？」

「あ、あははは……」

「……………いや、笑って誤魔化すなよ」

「なんだか各々で楽しそうに話し合ってるな。ま、ともかく……」

「皆はもう自己紹介済ませたのか？」

「うん。私とよわちゃんみたいに、ユニちゃんとするしあちゃんの事はかなたちやんとく口ちゃんがり合いで上手く話が進んだんだ」

「るしあに関しちや私らの後輩だぜ、な？」

「はい、ウェイターさん♪それじゃ改めまして、るうは潤羽るしあ、ネクロマンサー死霊術士の家系の生

まれなのです。よろしくです♪」

「ん、よろしくな。そして、御二方は初めまして。俺は鴻山龍神、高二。昨日近くの『弥吾呉学園』に編入してきた。んで家はこつから少し離れたところにあるでけえシェアハウスで管理人代理をしてて、ここにもちよくちよく顔を出すと思つからよろしくな」

「えと、花風りんです！中学一年生です！以後よろしくお願いします！」

「私はユニ・アルシア。今はよわちゃん達と同じ学校に通つてはいるけどかなたんとは

昔っからの友達なんです、ね〜♪」

「ね〜♪っしょつと……」「みゃん……」

「ああ、あなた、こころは俺が背負うよ。……そそ、さつき聞かれたこころとの関係だが……バイトで出会った妹のような奴つてところだ」

「妹……?」

「よわはホントの妹のようなもんだらう?」

「……………」

「そういうことじゃないんだよ、リョウくん……」

「??」

よう分からんが、二人と近くで聞いてたウララが「ダメだこりや」つて頭抱えてんのが妙に腹立つなあ……………」

「積もる話もあるが、そろそろ学園行くとしようぜ。潤羽はこつち、よわとアイリス、美夜、それにユニが別の同じ学校で……?」

「あ、私は皆さんと同じ『弥吾呉学園』です」

「それじゃ、花風も一緒に行こうぜ。シン、いいだろ?」

「もとよりそのつもりだ」

「シン?」

「俺のあだ名。俺の名前、りょうがと呼んで漢字は難しい方の龍に神っていう風に書くんだが、簡単に読みやすい神の方を音読みしてるのさ」

「って言うのは建前で小さい頃、剛くんが……『お前シンって漢字書くのか!』って言うって、それを訂正するのも面倒くさくなってそのまま放置してたら定着したあだ名だよね」

「そうとも言う」

「鳳先輩……」

「言っておくがガキの頃の話で、しかも当時『龍』なんて漢字読み書き出来るやつなんてそうそうおらんからな?今のアイツは頭すげえいいから」

「『ええ……?』」

金剛や……お前、一体どんな学校生活送ってるんだ……?レミとクロ、そして、俺の背中では寝ているところを除いたウチの学園勢が皆『うっそだあ』って顔してるぞ……?

—————

「ハアツクション!!……うあ?……わあああ!!遅刻遅刻遅刻ううううう!!!」

「金剛朝からうるさいにやあ!!」

「起こしたつてくれても良かったんじゃねえ!?!?」

「二度起こしたけど、また寝た金剛が悪いにや。みやあは全然一切これっぽっちも悪くにやいにや」

「くっそおお!!シンと一緒に学校行くつもりだったのに!!」

「え!?!シン兄帰ってきてたのかにや!?!?なんで教えてくれなかったにや!!今から頑張れば間に合うかにや……?」

「昨日俺も知ったの!!ともあれ……あれ!?!」

「行つてきます、にや!!」「待つてええええ!!!!」

—————

………後で本人にも少し聞いてみるとするか……。

そんなことをぼんやりと思いつつ、俺たちは教会を出て連絡先を交換し合った後、それぞれの学校へ向けて歩き始めた。その道中……

「鴻山さん鴻山さん」

「どった、潤羽」

「鴻山さんて、コスプレに興味ある?」

「コスプレ………ねえ?」

「龍神先輩の……コスプレ?」



「なんか怖え振り向き方だな、おい。して、コスプレか。……………んく……………興味ねえこたあねえんだが」

「お？」

「しっかし……………なあ……………？」

「ふふふ……………」

「レミ、どうしたのそんな悪い顔して……………」

「う、ううん、なんでもない……………ふふ」

おのーれえー、あれ知ってるからって笑うんじやあない。

「……………少し考えさせてくれ」

「いいよ。るう達は体験でも本入部でもどちらでも歓迎するからー」

「助かる……………つて、そーいやかなたや」

「へっ？アツハイ！」

「今の潤羽との話で思い出したんだが、ここの学園で、部活とかには必ず入ってないといけないのか？」

「いや、推奨はされてますけど強制はされていませんよ。ひとつあるとすれば、何個かかけ持ちすることも許可されてますので、迷ったら一応全部やるって手もあります」

ほほう？いいね、そーいうの。やりたいものを自由にやらせてくれるってのはありが

たいな。

「因みにるう達のクラブにはりんちゃんも入ってるよ〜」

「あ、はい。るしあちゃ……じゃなくてるしあ先輩たちのお世話になってます!」

「まだ学園じゃねえしそこまでかしこ回らなくてもいい。つかみんなもそうなんだが、俺自身かしまつてんのは好きじゃねえから、TPOは弁えて欲しいがそれ以外だったら先輩後輩関係なく普通に話してくれて構わねえよ」

「はい♪」「わかりまし……えと、分かった」

「僕には恐れ多い……」

「毎度思うんだが、俺は一体かなたの中でどんな立ち位置なんだ……?」

「それは気にちしちやダメだよ」

「うんうん、君が気にすることじゃない」

「言葉なく気づいてやるのがベストだ」

「??」

よく分からんが………やっぱり三人のやれやれって顔はなんだか無性に腹立つな  
……………。



そうして、相変わらずそこを背負いつつみんなと話しながら歩いている内に続々と

俺達と同じ制服の人達が増えていき、始業開始時間までには十分に余裕を持って校門を通る。

「な、間に合ったろ?.....さて、こころ、ほら起きろ〜」

「んみや.....もう学校.....?」

「そうだ、そろそろ自分の足で歩い」このままクラスまで.....」俺を恥ずかしさで殺す気か己は!!」

「みい.....ダメ.....?」

「んぐ.....今回だけだぞ.....」

「いいなあ、こころ.....」

「かなた?」

「はっ!何でもないよ!何でもない、何でもない.....」

「ねえねえ!今度るうもおんぶして欲しいなって」

「なして?」

「なんだかこころちゃんの姿を見てたら、気持ちよさそうって!」

「あ!それなら僕も.....!」

「.....機会があつたらな.....」

(ねえ、もしかして彼って.....)

(そ、実の姉妹はいないけど、ああやって妹系や姉系の人の頼みには殊更弱いよ)  
(シスコンなのか……)

(それじゃ、私たちのお願いとかも……?)

(可能性はある)

ぐぬぬ……後ろのヤツらめ絶対誤解してるな……?俺はシスコンじゃねえつてのに  
………。ただ、なんか断れなかつたり放つとけないだけなんだ……。

軽く肩を落とし、クロに一言言つてカバンを預けてから、早く学園内の道を覚えな  
いとな……?と思いつながら、かなたと花風に案内されて中等部の校舎へと向かう。すると

「あ、編入生くんみつけ」

「?」

その途中で、少しゆつたりと間延びした声をかけられてそちらを振り向くと、なんだ  
か見た目からしてふわふわしてる雰囲気的眼鏡をかけたシヨートの女子生徒がゆつた  
りとやってくる。

「おはろ〜ぼ〜」

「ロボ子さん、おはろ〜ぼ〜です!」

「先輩、おはろ〜ぼ〜です」

「……………」

「……………おはろ〜ぼ〜って何？」

「ほらほら、編入生くんも〜。おはろ〜ぼ〜♪」

「……………おはようございます」

「あや〜、乗ってくれなかった〜。残念」

「鴻山先輩、戸惑ってる？」

「大分」

「確かに初対面だとそうなっちゃうよね」

「そんなに固くならなくていいよ〜。私はロボ子、高等部三年生だよ〜」

先輩なの!?!身長は確かに高めだけど年下かと……………

「つと、鴻山龍神です。よろしく……………お願いします」

「鴻山くんね〜ふむふむ。よろしくね〜♪」

「それで……………中等部の方に生徒会の用事ですか？」

え?この人も生徒会?!マジで!?

「ううん、今日はね、鴻山くんに用事があるの〜」

「俺?」

「そう」

—————そらちゃんが、会いたがってるんだく」

……………どうやら今日は一日体力的にすげえ辛い日になりそうだ。



「……………『弥吾呉学園』ね。結構近いところやな、へへ」

「どうしたんですか？」

「なんだか楽しそうだね」

「ん？や、何…………」

…………私の懐かしい旧友が戻ってきたことで、これは出迎えに行けんなんて」

a c t | e n d

T o b e c o n t i n u e d